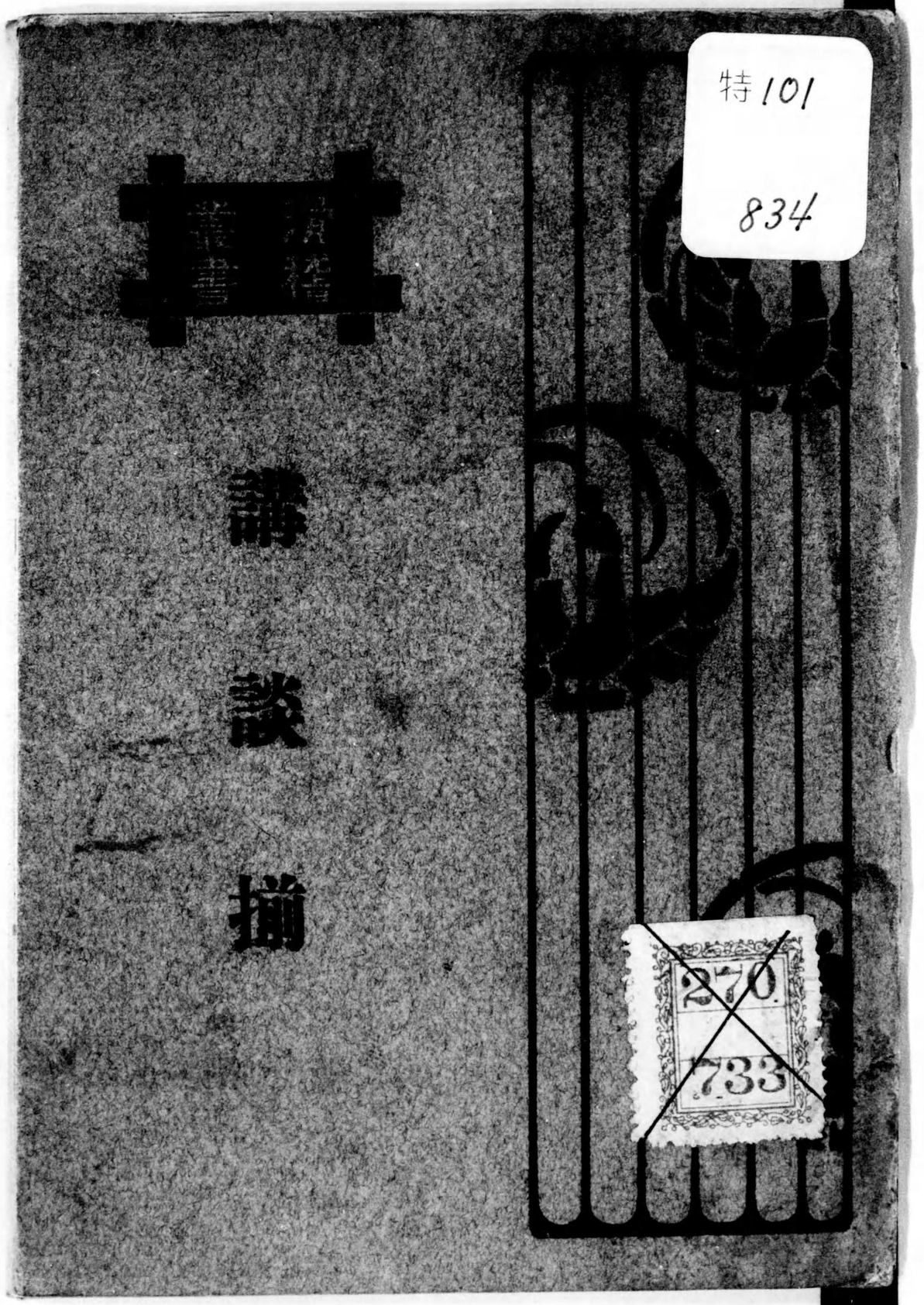

始

滑稽叢書

講談揃

特101
834

講談揃

2. 2. 14
内交

目次

人相爭れず……神田伯山
孝子と將軍……柴田南玉齋
秀吉の思違……邑井貞吉
飛入り相撲……桃川如燕
昆寛の小柄……松林伯鶴
水飲みの龍……蓁々齋桃葉
乾魚で音信……一龍齋貞山
一文惜百兩損……寶井馬琴

講談揃

人相爭れず

神田伯山講演
石原明倫速記

エー開明の今日、人相だの家相だのといふと諸君さんが信用をなさらなひやうだ、大坂では渡邊昇君が知事のときに、賣卜者といふものは人の心を迷はせるものだといふてお廢止になつた、此の路傍に出てゐる賣卜者は知らず、人相は實に爭うはれないものだ、先ごろ讀賣新聞にもありましたが、英國人で相を觀る人、是れは鼻相といつて鼻で觀る、鼻の格好から艶を觀て、豪膽だとか、臆

病だとか、或ひは記臆が宜いとか悪いとか、いふんだ、其の昔し三井寺の永德といふ和尚が、安倍晴明先生に對つて、

永「私しに劍難の相がありませうか、一つ觀て下さい」

トいつた時に晴明先生、永德の面色をつく〳〵觀てゐたが、

安「如何にも貴僧は、劍難の相があるかられ氣をつけなさい」

デ、傍らに聞いてゐた者が、

甲「三井寺の和尚さんに劍難の相のある氣づかひはない、多くは先生の觀ちがいだらふ」

ト影で言ッてゐた、然るに果せるかな夫れがあッた、治承四年高倉の宮御謀叛のとき、源三位頼政父子、三井寺の法師と一手になて宇治川に陣取る、平家へ清盛の下知として、新中納言知盛貳

万の兵を率ゐて乘り込んで來た、源氏は總崩れになつた、高倉の宮は流れ矢に當つて崩御、源三位頼政父子は、宇治の平等院で割腹をした、其のとき三井寺の永德といふ人は流れ矢に當つて死んだ、ソコデ皆々感心をして、

ト「何うしてお氣がつきましたか」

ト聞いたら晴明先生、

安「私に氣がつかなかッたが、永德が觀てくれといつたから觀たら、正しく劍難の相があつた」

夫れゆゑ相といふものは爭そはれないものだ、當今裁判官の何某といふ御人は能く骨相を御覽なさる、賣卜者は何んなに出來ても賊相を言はず、死相を言はず、婦人が觀てもらひに來たとき、密

通をしてゐる相を言はない、然るに麴町平河町にゐた平澤左京といふ先生は死相を指した、何日死ぬとは言はないが、何日頃かられ前、病氣が出るから用心をしなさい、ト敎へてくれた、其の左京といふ人が兄弟同やうにいたしてゐる、小川町の猿樂町に中川馬之助といふれ旗本がある、此のお方が夫人さんもあらッしッたが、御同勤に誘はれて、新吉原京町一丁目の額俵といふ妓樓、其樓の常盤木といふ娼妓に熱くなッた、お金は勿論衣類から帶替への大小まで質入れにする始末、最後には咎もない夫人さんを離緣して、其常盤木といふのを落籍をして夫人さんになすッた、夫れゆゑに支罷頭は不首尾となり、親類へも出入りをすることが出來ない、併し迷ふといふものは恐いもの、誰れが交際をしないでも

常盤木を思ふ存分已れが妻にしたによつて不足はないといつてゐる、此のお方が至ッてれ馬がお好きだ、

中「勇士の功は馬にあり、海軍に入用はないけれど、スワ陸軍といへば、第壹番に馬が肝要だ」

ト毎日のやうに馬に乘ッて、麴町の馬場へ稽古に行らッしやる、往きか返りか必らず平澤左京のところへ立ち寄ッて人相を觀て貰ッた、又は御巨分か酒肴を散財して饗應る、左京先生も亦た御馳走をするといふやうなわけ、至つて睦ましい、或る一日中川馬之助、堀の内のお祖師さまへ參詣をした、お連れがあッたものだから此の時は馬に乘らない、デ、歸りに連れの者に別れて、只だ一人平河町の平澤左京のところへ立ち寄ッた、左京が、

左「ヤ、能く入らしッた、兩三日お見えなさらなかつたが何うなすッた」

中「少々風邪で稽古にまゐりません、今日は堀の内へ參詣をして只今戻り」

左「アー夫れは御信心」

中「詰らんものだが是れを……」

ト麥焦粉だの葉山葵だの土産物を夫れへお出しなすッた、

左「此れは種々有りがたう」

中「何うも毎日觀ていたゞいて、一日二日觀ていたゞかないと如何にも氣になつて詮方がござらん、何うか先生、今日は相替らず觀ていたゞきたい」

左「サア〳〵此方へ」

机の前に來つて坐つてゐる、此の相といふものは、お酒を飲んだときは血に狂ひがあるから分らない、風呂から出ッたときに分らない、平澤先生暫らくの間だ馬之助の顏を見つめてゐる

中「先生、何か變相が現はれましたか」

左「然やうで……兩三日以前までは斯ういふ相はなかッたが、貴君は死相があらわれた」

馬之助ビックリ驚ろいて、

中「斯くの通り拙者は無病息才、兩三日風邪であつたが、夫れも全快したによッて、今日堀の内へ參詣をしたくらゐ、頭痛一ついたさんものを……」

左「イヤ病ひで死ぬなぞといふわけでない」
中「然らば何で死ぬのです」
左「然やう、河へ陷ッて死ぬの、棚から物が落ちて、夫れが腦上へ打つかッて死ぬのといふ變死ではない、れ屋敷になければ成らないといふ大切な活物が尊公を殺す、お心あたりは有りませんか」
サア馬之助、兩手を組んで暫らく考がへたが、活物といへば屋敷にゐる生ものだ、ハテ何だらふと考がへたが、何うも胸に浮ばない、
中「何うも心あたりが有りません」
左「お待ちなさい、人を殺して殺される、是れは自業自得で免

れられないが、俄かに降りかゝッてくる災難だから、免れられないことは無からふ、只今易を立てませう、進んで免れるか、退ぞいて免れるか、進退の吉凶をトなつて見ませう」
夫れから左京先生、水垢離をとッて身体をスッカリ清めて、逆筮ではない、本筮を立ッて暫らく考がへて、
左「是れは免れられる」
中「夫れは有りがたい、何うしたら先生免れますか」
左「先づ其の貴君が危ふいといふ時間は、亥刻から丑刻までだモウ寅刻の聲を聞けば免れます、お屋敷になければ成らんといふ大切な活物だ、夫れは後手になつては行かんから、是れだはへと目的をつけたら、切ッておしまひなさい、先をとつ

て、刀の柄に手をかけたとき、ヨモヤ是れでは有るまいといふ」

中「成るほど」

左「アー憫然のものだと、貴君に菩提心が發ると後手になる、先んずるときは人を制すといふことがある、菩提心を發さんやう、鬼になッて先方を切ッておしまひなさい、夫れでなければ免れる道はない、宜しうござるか」

中「マ、斯く委しくお敎へくだすつて、夫れで活物に殺られるやうでは、天下の旗本とは言はれない、身不肖ではあるけれど、スワ事あるときは、上樣の御床机備へを固める中川馬之助、首尾よく活物を殺つて御覽に入れやう」

左「未だ時刻がお早いから一獻さしあげるで、充分勇氣をつけてお歸んなさい」

中「宜しい」

此れから酒や肴を取つて御馳走をしてくれるから、中川馬之助快い心もちに醉ッた、

中「最早や何時でござる」

左「只今彼れ是れ亥刻でござる」

中「然らば是れでれ暇いたさふ」

羽織を脱ッて、

中「此れをお預かり下さい」

左「承知いたした、必らず御油斷をいたしたまふナ」

中「委細承知」

ト暇を告げて起ちあがり、袴の股立ちを高く取りあげ、大小を閂ざしに帶し、紺足袋に福艸履、一ぱい機嫌で麹町平河町を出た、お堀端から只今の招魂社を後ろにして、九段坂をさしてやつてきた、彼處に俎橋といふ小橋がある、其の橋を渡つて突きあたりがもと白須甲斐守の屋敷だ、其の白須の屋敷について曲ると、右側が高家の大澤右京太夫の屋敷で、其の白須の屋敷について、大澤の横町を右へ曲ッて來る、是れが今川小路、其の横町へ曲つて如何しけん一人の男に出ッ會すと、一足跡へ飛び退ッて、中川馬之助、刀の柄へ手をかけて、

中「コレ待て……待て」

商人体の男おどろいて跡へ退ッた、

商「殿さま、何です」

中「何ですとは何だ、横町から出て來やアがッて不意に大きな口を開いて」

商「ヘエ、私しはツイ眠いもんですから、只今欠伸をいたしました」

中「ウン欠伸か、欠伸なら宜しい、大きな口を開いたから、拙者に喰ひつくかと思つて呼び留めたんだ」

商「御戯談仰しやつて」

中「戯談ではない、油斷はならん、活物だらふ」

商「イエ、脊負てをりますのは蠟燭でございます」

中「何時だと思ッてゐる」

商「亥刻少々前でございまする」

中「夫れ見ろ、亥刻少々前なら油斷のならないとこだ」

其の男は早ッ早と行き過ぎながら、

商「一面白くもねへ、欠伸をしたたんびに斬れて堪るもんか」

馬之助は猿樂町の我が屋敷へ歸つて來た、門番も何もゐない、貧乏屋敷だから、潜りの扉に一升德利が糸で釣るしてある、押せば德利が上るにつれて扉が開く、手を放せば德利が下つて自然と閉る、至つて輕便で安直な門番、門番は置かないくらゐだが、馬は飼つて馬部屋に繋いでゐるます、主人の歸ッたのを知ッてヒンヒン嘶いてゐる、中川馬之助、馬部屋の口へ來て、

中「コレ鹿毛、今日は獨りで嘶ぶ已れがゐないで寂しかッたらう、毎もなら其方に乘つて行くのだが、今日は連れがあつたによッて已れが徒歩で參つた、オーヒン〳〵嘶いて迎こぶは出迎の口上か、是れが人間なら、お歸んなさい、れ待申してゐたぐらゐを言ふのだ、併し畜生の悲しさに口を聞くことが出來ないから只だヒン〳〵言ふばかりだ、明日は天氣が宜さうだから毛洗をしてやらふ、已れも貧乏はしてゐるが、勇士の功は馬にあり、其方ばかりは決して放せない、無ければならん大切とは其方だ」

といふ時に馬之助、フト氣がついて考がへた」

中「待てよ、平澤先生が無ければならない大切な活物だと仰し

やつた、偖ては此の馬かしら、馬相といふものがあつて、殿さま方の乘馬になるか成らないか、相を觀て矢張り善惡が分るといふ、馬の乘り人に祟ッたといふは幾らもある、此の畜生が害をなすかしら、後手になッちやア成らないと云はれたヨシ……」

柄に手をかけ既に斬らふとは思つたが、

中「ヨモヤ此馬ではあるまい……イヤ然うでない、ヨモヤ此れでは有るまいといふものだと先生が仰しやつた、何うしやう……若し間ちがッた時は憫然なものだ」

ト暫し躊躇てゐる間だに不圖お氣がつかれたんで、細引をもつて馬の後足と前足をギリ〳〵縛ッた、馬はドウと倒れた、

中「是れで宜い、万一畜生が是れを食ひ切ッて奥へ來るうちには氣がつく、已れは寢はいたさん、丑刻を報まで起きてゐるから、夫れまで辛抱をしてゐろ、其の刻限が過れば解いてやるから」

全で人間へ言ふやうに言ひ含めて、夫れからお中の口から上つて來るといふと、烏猫の女でニャア〳〵言ひながら奥から出て來た

中「オヽくろか、嘸ぞ今日は寂しかッたらふ、是れも出迎ひに出たんだらふ、是れも畜生の哀しさ、口を辨くことが出來んから、只だニャア〳〵言ふばかりだ、只今美味いものを御馳走をしてやる、是れは亡父さんの代から飼つてあるモウ婆アだ、併し可愛いやつだ」

ト言ひながら又た氣がついて馬之助考がへた、

中「待てよ、此の猫かしら、第一番に本所の猫服部、東海道岡崎の猫、鍋島の猫、猫は魔ものだによつて其の家へ祟るといふは往々あること、併し已れが猫ぐらゐに食い殺される氣づかひはない、然れども用心に如はない」

ト手拭を出して猫の四足を緊かり縛ッて戸棚へ打ち込み、

中「先づ此れで宜い、此の屋敷の活物といふ活物は殘らず捕虜にしたから」

ト襖を開けて御自分のお居室へ這入らふとすると、膳椀皿小鉢が取り散してあつて、夫人さんは戸棚へ寄りかゝッて、顔を眞赤にして片足をダラリと投げ出して快い心もちさうに寢てゐる、燭臺の蠟燭の眞が溜ッて暗くなッてゐる、馬之助ッカ〳〵と這入ッて其の眞を剪て、ペタリと坐ッて夫人さんの寢顔を見てゐたが」

中「アー美い女だ、吉原五町街仲の町張にも此のくらゐの美婦は無かッたから、已れが迷ッたのも無理はない、美い女の寐顔は亦た別段だ」

とシケ〳〵眺めて、

中「此れ奥、只今戻ッた……此れ常盤木、只今戻ッた……是れ奥……」

二三度呼んだが夢中でスヤ〳〵寢てゐる、時に馬之助兩手を組んで考がへてゐたが、

中「ハテ、是れかしら、無ければならぬ大切な活物だと云は

れた、此れより他にモウ活物はない、アー迷ふた、迷ふてみれば沽のごとく、了ッてみれば水のごとく、仮令へ此れでは無いにもしろ、馬ですら、猫ですら、出迎へをするものを、況て人間の皮を冠ッてゐる身で、主人が歸らぬ前に一人で酒を食ッて、此の始末は何ごとだ、此いつゆゑに親類と絶交をし、支配頭も不首尾となつて、我れが役出の出世の妨げ、是れを殺しておいて親類や支配頭へ改心をいたしたといふ証據を見せやう。幸はひ離縁をいたした奥も、未だ再縁をしないといふから、元の鞘へ納めたら、支配頭の不首尾も宜しからふ、改心いたした証據、オヽ、然うだ、汝れ何うするか見ろ」

馬之助今は本心に立ちかへッてズッと起ちあがつた、長押にかゝ

ッて居る槍を取つて鞘をはねれば銀杏穂、たわいもなく寢てゐる夫人さんの胸もとを刺した、キャッといふ悲鳴、怒りに任せて突いたから充分貫ぬいて、槍の穂先きが戸棚のうちへ這入ッた、トタンに戸棚のうちでウンといふ聲がした、

中「扨はッ」

ト馬之助、モウ一本肩口のあたりを突いて夫人さん突ッかへした直にモウ一本戸棚のうちへ突ッ込むと、又もウーンと呻く聲がする、

中「扨は彌よ誰れるかをわい」

ト槍の穂先きでパッと戸棚を聞いてみると、御番葛籠から血がダク〳〵出てゐる、槍を傍へに置いて葛籠を取り出した、蓋を刎ね

退けてみると、額俵にゐた妓夫の金八だ、

中「ヤ、爾は金八だナ」

金「まことに殿さま恐れ入りました、金八でございます」

中「何で此處に忍んでゐた」

金「斯くなりました以上は、最早や僞わりは申しません、實は私し遊廓にをるうちから常盤木とは夫婦約束をしたほどの交情、併し貴君が、金で根引をしたんだから致かたがない、ソコデお不在を幸はひ折々忍んでをります、今晩といふ今晩は毒藥を持參して夫人さんに渡してれいて、去れを貴君に飲まして殺してしまッて、私しの故郷の甲州谷村へ夫人さんを連れて逃る約束をいたしました、然處がお歸りが遲いものでご

ございますから、夫人さんは酩酊をして寢てれしまひなすつた、斯ういふ始末でございます、モウ私しは迚も助かりませんから、何うか一おもひに殺してください、眞とに恐れ入りますが……」

中「扨は疾より姦通をしてをつたか、併し片口では分らない」

ト斷末魔の夫人さんを調べてみると、

常「まことに今こそ濟みません」

實は斯う〳〵と姦通の次第から、今金八が申した通りを語ッて、ソコデ兩人の口書を取つて、トウ〳〵兩人の首を打ちおとした、夜の明けるのを待つて馬之助馬に打ち乘り、麴町平河町へ行つて平澤左京に對面をして、

中「サア先生、私しの相を見てください」
先生暫らく見てゐたが、
左「さては活物をお殺なすつたか」
中「二疋治ました」
其の次第は斯う〳〵云々と有し事がらを落なく物語ッた、
左「夫れは〳〵、果して今日貴君の相を觀るところ至つて長命、眞とにお目出たい」
ト左京悉々く喜こんだ、ソコデ馬之助事の次第を支配頭へ届け、親類へも報知せる、上々の首尾、夫れから先の離縁をした夫人さんを呼びもどし、御夫婦交情も至つて宜く、八拾餘歳まで長壽を保つて此の世を去られた、此れ馬之助死相を示されて改心をした、

平澤左京の人相の優れてゐる眞の壹席のお話し……』　(完)

人相爭れず

孝子と將軍

柴田南玉齋講演
石原明倫速記

エー滑稽講談をといふ御依頼に基づき三代將軍家光公の御仁惠のお話しを壹席伺がひます、總て此の家は三代目が肝要でございまして、外國のことは卒知らず、我皇國の抑も歴史を考がへ見るのに、清盛、重盛、宗盛の三代で平家は沒落し、頼朝、頼家、實朝の三代で源氏は亡び、信長、信忠、秀信の三代で織田の血脉は絶ね、秀吉、秀次、秀頼で豊臣家は滅却いたしました、此の三代目が確かり蹈へませんければ其の家の榮をとること能はず、然れば川柳点に

初松魚伊勢屋の前を駈け通り
貳代目の伊勢屋松魚の荷を下し
賣家を唐やうで書く三代目

是れらは穿ッた秀句でございます、其の身代を起す人は驕りを省き、節儉をもッて家をおこしまするゆゑに贅澤なことは更に好まず、彼の初松魚なゞといふものは決して食しません、又た多くの奉公人を使ふ人に、已れ一人美味を食ひ多くの奉公人に見せておくわけには行かぬ、然れば奉公人と同やうの麁蒸を食つて稼業を勵む、其のくらゐだから仮初にも華美榮耀は此れを廢して顧りみず、漸々身代をつくり我が子に讓る、ソコデ二代目の伊勢屋の主人となつたものは、已れは江戸ッ子で生れながら、江戸の者が賞

翫する初松魚を食はぬのも殘念だ魚賣を招び込み、直段を聞いて大きに驚ろき、然やうな高きものは迚も食しがたしと此れを斷わります、併し買はんまでも魚賣を招び込むだけ聊か驕りの氣が兆しました、夫れが三代目になりますると祖父や父の苦心を忘れ先づ何でとも狹斜風流を旨として、今までの紋所を改ため、光琳の裏梅の粋な紋をつけて、手跡も俗やうとて御家流、或ひは瀧本の流義を捨てゝ唐やう文字を拈くる、文人墨客の交はりをする、今日は某甲の會、今日は某乙の名弘なゞといふ場所へ出席し、先生と崇められ或ひは大人と尊稱されるのを宜さことに思ッてゐる此れがために家産を傾むけ、遂には骨を折りし唐やう文字にて賣家の札を貼るやうなことが出來いたします、然れば此の三代目が

家を蹈まへて後榮を子孫へ殘さふといふのは一かたならぬお盡力でございます、彼の北條が九代相續いたしましたのは、三代目の泰時が上下を治め、能く政事にわたり修身齋家の敎に則とり、此れがために子孫榮えて九代相續をいたしました、足利の十三代は彼の三代目北山義滿、此れが豪邁で不羈の英雄でございました、朝廷へ對しては大きに不敬の人ではございましたが、能く天下の諸候を統御した、然れば足利十三代の榮えは全たく此の義滿の世に興ッたやうに存じられます、德川家十五代の盛んなるは三代家光公智仁勇兼備にましまし、能く人民を撫育すること慈母の赤子を見るがごとく、然れば智仁武勇は御世の御寶と家光公をさして上下賛へまするほど眞とに御仁心の厚い御方、折節鷹野遠馬等に伴

かせられます、忠臣、孝子、義僕、節婦等へ御褒美を遣はされといふことは度々でございます、然れば此の君の御代にお成先きにて御賞美の品沙汰にあづかりしもの多くございます、某る親孝行者が壹人ありました、年老さらばいたる母を脊負ひ上樣のお成先きを突ッ切りました、忽ち其の場で取り押へられてお調べを蒙むりました、然處が、

甲「私しの母が何うか公方樣を拜みたい〳〵と申します、其の母の言葉を背けませんから脊負ひまして、公方樣のお通り筋を徘徊いたし、圖らずれ供先きを切りました段は重々恐れ入りました」

母子とも大地へ手をついて頻りに謝びました、夫れを將軍へ申し

上げると、

將「孝は百行の長、母の言葉を背いては成らぬと脊負ふて道筋を呻吟ひ、圖らず余が供先きを切りしとは憫然至極、且つ志ざしは至孝の者、是れへ召し連れい、褒美をつかはす」

將軍お手づから黄金一枚を孝子へ賜はり、

將「爾來孝道を勵め、能く其方は母の言葉を背かず是れへ連れ參ッた、依て今日其の方がなしたる無禮を免して褒美を與せる」

尚は御下城の後ち町方へ仰せ渡されて青銅拾五貫文下しおかれたといふ、然るに某親不孝者が此れを承たまはり、

甲「此リャア傲氣だ、親孝行をすりやア御褒美を貰へる、已れも公方さまが御成のあッたとき母親を連れて行ッて、一番賭博の資金を調れへやう」

或るとき將軍家目黒へ御成の當日、ノたりと母親を突然脊負をふといたしました、母親は不意に驚ろき、

母「コレ何をする」

忰「何をしても宜いから默止つて已れの言ふことを聞いて、脊中へ乘ッかんねへ」

母親は、

母「お前の言ふことを聞いて堪るものか、昔し信州に親不孝者があッて、山へ持ッてッて親を捨てた、夫れで其の山を姨捨山といふ、扨ては其方も此母を捨に行ふといふんだらふ」

悴「ナアに案事なさんな、已ア親孝行をして御褒美を貰ふんだ」

母「此の不孝者めが、親孝行が聞いて呆れる、一緒に行くのは妾しは否やだ」

悴「其んな強情を見ふと蹈み殺すぞ」

突然母親の横ッ面をポカーリ擲りたふして、無理やりに脊中へ乘せて戸外へ飛び出し、御成のお供先きを突ッ切り、即坐に取り押へられてれ調べにあると、

悴「私しは母親が公方さまを拜みたいと申します、夫れゆゑ母を連れて參りました、圖らずお供先きを切りました段、重々恐れ入りまする」

ト申し上げる、

役「フン、夫れでは母親が上樣を拜みたいと申すから、連れて參ッたと申すのか」

悴「然やうでございます」

母「イエ夫れは大虛言でございます、此の野郎はモウ賭博を賭つ、娼妓買ひをする、實に宜からぬことばかり致して、我が子ながら愛想もこそも盡き果てましたから、不孝願ひを申し立てませうと存じてをッたところ、今日は親孝行をすると言ッて妾を肩に擔ぎますから、此んな野郎に親孝行の出來る氣づかひはございません、其んなことを言ッて欺して妾を捨てに行くのに違ひない、否やだ〳〵と申しますと、强情を張ッて已れの言ふことを諾ねへと蹈み殺すと、妾しの横ッ面を目

のくぼむほど擲りたふし、直に脊負ッて、無理やりに此處まで參りました、此んな不孝者はございません、何うか不孝のお咎めを願ひます」

有りてへに申上げた、

役「ヤ、不届の親不孝者、上樣へ申し上げたら、定めし嚴しいお咎めがあらう」

役人も親不孝者を憎んで委細を申し上げた、將軍家此れを聞し召し、頓て母子の者を夫れへ召され、

將「其方は平常親孝行をさへ致せば褒美を貰へると心得をる、然れば其方今日母を無理に取らへて余が供先きを突ッ切ッた同じ眞似でも宜い眞似を致したによッて褒美を與せる、後來

改心して眞に親々に孝養を盡せ」

またお手づから黃金を下しおかれたりと、是れは三代將軍御仁政の最とも下々を奬勵させんための深き思し召し、眞似をいたすなら宜い眞似をいたすべきでございます、總て斯やうなことが往々ございます、

或るとき將軍、小松川へ御成、御秘藏のお鷹をお拳にお据ゑあそばして驚へお合けあそばしたとき、何ういふ加減か翦れて、鷹は未申の方へ飛び去り、れ鷹は戌亥の方へ虛空遙かに翔ける、お鷹匠は餌箱をたゝいて頻りに促がしたが更に歸らず、御供の面々は大いに驚ろき、雲井深く彼れを翔けさしてはならじと、れ鷹の翔り行く跡を慕ふて一同、野も山も嫌ひなく眞ッ平地に追ふて參る

其の時分のお成はれ手輕でございます、跡には將軍只だお一かた遙かに空をお眺めあろばし、其處となく此處となく頻りに將軍散歩をあろばした、然るに今日はお鷹野の儀でございますから、御遊獵の地は殘らず往來留になッてゐるから、誰れ一人として往來するものはない、然るに一軒の農夫家、南向きに豕を建て、瀨戸口を大きく取り、年齡六十あまりになりまする老婆が、椽の鼻で糸車をブン〳〵廻しながら糸を繰ッてゐる、將軍ヂロリと此れを御覽なろばして、ツカ〳〵と瀨戸の内に入り、

將「此りや白湯を持て……白湯を持て」

ト仰せられるが、更に老婆は一寸と見たきりで答へもなく、濟してブン〳〵糸を繰ッてゐる、

將「即答を許す、白湯を持て」

一向れ答へをいたしません、

將「遠慮深い、即答を許す、是れ白湯を持て、白湯を持て」

再應仰せがあるとき此の老婆、將軍さまをヂロ〳〵見ながら、

婆「何を言はッしやる、サッパリ妾にやア分りません、一昨年から耳遠になりまして、今年になッたらカラ聾、何を言ひなさるのやらサッパリ分りません、用が有らッしやるなら耳の傍に口を寄せて、聲のあらん限呼らッしやるか、手眞似で示して見せなさりやア何とか妾も返辞をします」

將「ウン、扨は耳聾したるか、然らば聞えんのは無理ならぬこと」

と將軍手眞似で白湯を吳れと、此の通り咽喉が乾くといふ体から、茶碗を汲んで飲む風をあろばした、

婆「ウン、何か飲みたいと言はつしやるのか」

將「ウン然うだ」

婆「其んなら其の鑵子の湯が沸騰ッてゐる、其の傍に柄杓がある、茶碗もあるから勝手に飲まッしやい」

將「然やうなら免せ」

將軍樣側から廻ッて御覽あそばすと、成るほど壹間に參尺の爐が切ッてあッて、鑵子に湯が沸騰ッてゐる、傍に煤けた柄杓、樣の欠けた茶碗が三つ四つ置いてある、其の茶碗へお手づから湯を汲んで貳參杯召しあがッて咽喉の乾きをお止めあろばし、

將「アー是れにて大きに渴を止めた、此りや老婆、刻限は何時だ……成るほど聾ほど便りなきものはない」

將軍家、樣側へ足を投げ出して四方の風景を御覽あそばしてゐる然處へバタ〳〵と足音がいたしました、御覽あろばすと年のころ十一二の小僧、尻切り半纏に繩の帶、頭髯は油ッ氣もなく散し髮、全で河童小僧のやうだ、草籠を脊負ふて腰に鎌を帶し瀨戸の内へ乘り込んで來た、

子「婆さん、只今歸ッた」

子僧の聲は聞き馴れてると見えて、婆さんヂロリと見て、

婆「今日は大層早く歸ッて來たナ」

子「ウン、今日は公方さまが鷹野にござらしッて、お目障りに

なッちやア成らねへから早く歸れと名主さまが言はしッて、其んなら已れ公方さまア拜んで歸らふといふと、公方さまア迎も拜むことが出來ねへ、早く歸れと斯う叱言を言はれた、夫れほど尊といものなら尙ほ拜みてへもんだと田の畔に屈んで見てゐたら、兩刀帶しめ竹ッきれ振り廻して、叱々と犬でも逐ふやうに逐やアがつた、夫れで已ア歸ッて來た」

婆「オー先の公方さまは、未だお前の生れねへときに、爾れの祖父さまが先の村役をしてござらしッたから、お通り筋へ出て拜めたが、今度の公方さまア何んなれ方だか爾れ拜んで來たか」

子「已ア名主さまに叱言を言はれたけれと、已の婆さまア先の

公方さまア拜んだか、今度の公方さまア未だ拜むめへから、已が拜んで話しいしべゑと思ッたが、兩刀帶に逐はれたんで拜まねへで歸ッて來た、夫れだけれど村の衆の云ふにやア、先の公方さまア年を老ッてゐるが男は美い、今度の公方さまア色が眞ッ黑で出額すけだ」

將軍傍らで是れをお聞きあろばして、色の黑いといふのは搆はぬが出額すけとは情けない、京童の口善惡ないとは是れだと思し召した、

子「サア婆さま、午飯を食はしてくれろ」

婆「已らは糸を引てゐて手が放されない、手前臺所へ行ッて菜の浸しものが摺鉢の中に調理れへてあるから、一人で其處へ

膳を出して、何時までも已れが手を待たず、サッサと飯を盛ッて、其の日なた向きの椽側が暖たかいから其處で食へ」

子「夫れぢやァ然うしやう」

ト子僧は椽側へ上ッて將軍家をヂロ〳〵見て、

子「ヤァ此處に此んな人がゐる、大人さんは前何處から來た」

始めて大人さんと言はれ、將軍最と興あることに思し召し、

將「余は暫し其方の家を借りて休息いたしてをるのヂャ」

子「然うか、れ前草鞋を穿いて然うやつてるてなナ無作法千万椽側だから宜いが、疊なら泥が掛つて婆さんに叱言を言はれるぜ」

ト將軍家を子僧は尻目にかけて臺所へ起つて行き、頓て緣の取れ

た日光膳の上へ剝げた椀、茶澁で眞ッ黑になる飯茶碗を載せ、籌の一二ヶ所破裂てゐる飯櫃を椽側へ運び、大きな摺盆を其處へ持ッて參りまして、飯櫃の蓋を開けて麥飯をコテ〳〵茶碗に盛し、菜箸も無いと見ゐて摺盆の浸し物を手づかみで椀の中へ入れ、頓て著をもッて子僧麥飯を食い始めた、將軍家御覽になつて、

將「其の飯は通例のとは異なるやうヂャが何だ」

子「大人さん此りやァ麥飯だ」

將「ハヽァ麥飯か……美味いか」

子「美味くなくッてサ」

將「然やうか、其方等の食するものを余が食はざるといふも、下の情に疎きものだ、依て其の麥飯を余に一ぱい振舞ふてく

れ」

子「何だ麥飯を食はせろといふのか」

將「追て褒賞を與せる、早々余に振舞ふてくれ」

子「意地の汚ねへ人だナ、ヂャア錢を置くか」

將「一粒万倍にして與せる」

子「婆さん、此の大人さんが飯を馳走になりてへといふが食はしても宜いか、婆さん、此の大人さんに麥飯を馳走しても宜いかい」

老婆は漸う此れを聞き分け、

婆「オヽ、腹が空ッたから其んなことを云はッしやるんだ、食はして進せろ」

子「婆さんが宜いてへから食はせる、其の代りお對膳だよ」

公方さまと汚ない農民の子僧とお對膳だ、茶碗と箸を持つて來さして、

子「サ、已れが給仕をしてやる」

眞ッ黑な五郎八茶碗へ麥飯をコテ〳〵盛て公方さまの前へ出し、

子「れ菜はお前と已れと合持ちだ、兩人で此の椀のを食ふんだせ」

ト手掴みで菜の浸し物を擂盆から椀の中へ入れ、

子「婆さんに叱られるけれどモウ一つ負けとけ」

と又一つ掴み込んで盛りあげた、汚ならしいが將軍家更にお構ひなく、麥飯を食べてみると更に美味くない、モヽ〳〵して口の中

を突ッつくやうでズン〳〵食られない、菜の浸し物を召し食ッて見ると、此りや又別だ、天然の味はひがあッて餘ほど美味い」

將「此りや美味い、餘ほど美な味はひ・何うも餘ほど結構な味はひ……是れは美味い」

子「オイ大人さん、お前お菜ばかり食ッちやア可けぬへ、お飯ト菜ばかり召し食る、子僧驚ろいた、

三口にれ菜一口が普通だ、お前なアれ菜三口にお飯一口、ソラ無くなッちまつた、エー最う一掴み負けろ」

ト子僧復た椀の中へ浸し物を掴み込んだ、麥飯一碗に菜の浸し物を三椀召しあがつて、漸々將軍家食事を終りたまひ、

將「民と共に苦しみ民と共に樂しむ、此れ天下泰平の基、余は

今日其方の食せし麥飯を食し、悉く滿足である、アー宜い味はひであつた、時に其方も最う澤山か」

子「已れもモウれ終にしやう」

公方さまの前へ子僧胡坐をかいて、

子「今日は公方さまがお鷹野にござッたが、お前はお供の人か」

將軍家お笑ひなすッて、

將「いかにも然やうだ、シテ其方は何歳だ」

子「已れは十二だ」

將「拾貳歳、名は何といふ」

子「名前は長左衛門」

將「長左衛門とは餘ほど老成た名前ぢやナ」

長「已れの家は代々長左衛門、祖父さまも長左衛門だ」

將「シテ見れば其方は當子で其の名前を冐すのぢやナ、彼れに糸を引てゐる彼女は何だ」

長「祖母さんだ」

將「其方の祖母か、シテ其方の兩親は如何した」

長「ナニ」

將「父親　母親は如何いたした」

お尋ねなされば、子僧はホロリと涙をこぼして、指先きにて涙を掻き廻しながら、

長「れ父さんは、已れが母さんの腹にゐるうちに、惡い病氣を煩らつて死んでしまつた、而して已れが生れると、夫れを苦

に病んで母さんも死んでしまふ、夫れから祖母さんが此の家の血統だからと言つて、已れを大切に育てゝくれて、田畑仕事をするにも何處へ行くにも、已れを肌へ脊負つて祖母さんが育てゝくれたんだ」

將「然れば其方は生れおちて兩親に離れたか、鰥寡孤獨は國の窮民、哀れな者ぢや」

ト將軍家、子僧の頭を撫でゝ御落涙、

子「夫れから已らが祖母さんの傍を離れると寂しいだらふと思ふから、江戸のれ祭りが大層だ、龜江戸のお祭りが賑やかだと、土地の者は船へ乘つて、揃ひの衣服を着て手拭を頬冠りしたり、鉢巻をしたりして皆な行く、其の度びに已れも行き

てへが我慢をして、始終祖母さんの傍にゐて話し相手をしてゐる、早く大きくなッて、恩がへしに祖母さんを大切にしやうと、其のことばかり思ッて、田の草を取ッたり、巳ア縄を掬ッたりして、是れでも祖母さんの手助けをしてゐるのよ」

將軍頻りに子僧の言葉を聞し召して御感心あらばし、孝經一冊讀まぬ者にして實に此のごとき孝行盡すとは、賞すべきの限りなりと、頻りに子僧の頭を撫でゝ、上樣御機嫌斜めならず、其のうちお供方の面々漸う翦れたお鷹を押へて以前のところへ引返し、上樣を見上げ奉まつらんとするに、將軍何れへ入らせられしやれ姿が見えない、公方さまが翦れちまッたなア仕やうがない、何處に在しますかと八方をお尋ね申すと、此の農家の椽側に小兒と睦まし

しくお話しを遊ばされ、傍らには老婆が糸を引ッて更に敬まふ舉動もない、

供「這は恐れ多し、勿体なし」

トお供の面々何れも瀬戸口へ馳せ付け、お鷹も御無事に一同にて取り押へ、聊さかもお鷹に負傷なき由を申し上げた、上樣の御直覧に供へ、

供「斯る厭せき家に御休息あらばすは尊体の汚れ、速やかに御歸城あらせられ然るべく……此りや恐れ多いぞ退れい……」

傍らなる者を制すれば、將軍、

將「苦しうない、決して制すナ、捨て置け……此りや、余は當家において白湯を所望し、咽喉の渇を止め、尚ほ麥飯を一椀

食し、殊のほか馳走にあづかりしぞ、一同然やう承知いたせ」

一同「ハッ」

意地の汚ない公方さまだと腹の中では思つたが、表面には出さないい、

一同「夫れは恐悦至極に存じ奉まつる」

將「初めて余は農民の食する麥飯の味はひを心得た、今日は宜き鷹野に參り喜こばしく存ずる」

一同「ハッ……恐悦至極に存じ奉まつる」

將「此上は歸城いたすであらふ」

ト早速御立坐になる、小兒は御容子が是さまでと變りしに驚ろいてはゐたが、流石に子供の臆面なく、

長「大人さんモウ歸るのか」

供「是れ〳〵大人さんとは何だ、恐れ多いぞ」

將「アー苦しうない、捨てれけ〳〵、余が身分を知らんのである、只今歸城がけ名乗りつかはせ」

大「ハッ」

大久保彦左衛門小兒の傍はらへ來ッて、

大「此りや子僧、其方に上樣の御身分御名前を申し聞ける、愼しんで承たまはれ、彼れに在ますは征夷大將軍……」

將「アー是れ……然ういふては子僧には相分らん、公方だと言ふて聞かせい」

大「ハッ……彼れに在ますは御公方さまであらせられるぞ」

長「エッ、公方さま……」

一に禁裏、二に公方さまといへば、犬打つ童にいたるまで尊といことは心得てゐる、只今御公方さまと言はれて小兒は「アッ」と驚ろいて樣側より飛び下りんとする、將軍家御覽あうばして、

將「アー是れ〳〵小兒、夫れには及ばん、捨ておけ〳〵」

トお言葉を下されたが小兒は耳にも入れず、糸取る老婆の手を取って樣より大地に飛び下り、婆さんの耳邊に口を寄せて、

長「オヽイ祖母さん、己アとこへ公方さまがござらしッたんだ拜みたいと言はしッた公方さまが、彼處にゐるアノ大人さんだ、早く歸らねへうちに拜みなさい」

老婆の耳に此れが通じましたから、

婆「ヤレ勿体なや有りがたや」

ト老婆は大地へペタリと坐り手を合せて伏し拜む、上樣御覽あそばせば、小兒は其背後へ手をついて河童頭を大地に摺つけてゐる、

將「アー彌々剛毅朴吶は仁に近し、德なき余を慕ひ下々が斯くまで余を思ひくれるとは、是れ天下安全、一は帝王の宸襟を安んじ奉まつる、即はち國の榮なり」

ト上樣殊のほか御感心あそばし、御歸城の後ち直に代官へ御沙汰になり、代官役宅にて長左衛門といふ小兒の家柄をお糺しになると、當村の草分けにして以前は村役を勤めし者なるが、此の小兒の父が放蕩懶惰に身を持ちくづし、家產を失なひ遂には斯く零落て、只今では僅かの田地を持ッてゐる水呑み農民、併し此の小兒

が孝行の志ざしにめんじて三拾石下され、年貢一代諸役を免じるといふ有りがたい御沙汰を蒙ふり、小兒の喜こび比喩ふるに物なく、ソコデ此の小兒の家へ上樣は休息あらばされ、麥飯を召し食らせられたは上此もなき名譽なりとて、上樣の召し食らせられた膳椀は此の家の寶物となし、其の家の周圍へ注連を張ッて一切他人の這入らんやうにいたし、新たに其の傍らへ家を建てゝ是れを住居といたし苗字を許されまして小松長左衛門と名乘ることに相成り、只今もつて西葛西小松村に其の子孫連綿と榮ゑをります、其の家から消毒丸といふ藥を施こしに出します、是れ三代將軍の御仁惠、小松長左衛門の先祖が孝道のお話し是にて讀み切り」

孝子と將軍終

秀吉の思違

邑井貞吉講演
石原明倫速記

秀吉は尾州愛知郡の上の中村で生れた人で、幼名を三之助、後ちに太政大臣關白になッた、言ふまでのことはないが、下賤に生立ッて充分の教育はなかッた人で、然れども万ざら無丁字といふ者でもなく、殊に器用な性質で、一たび是れをと思ふことは、必ら ず自分の心に得るところがあるといふ、

布引の瀧の白糸くりかへし
來て見んまでも契りむすばん

是れは攝州布引の山に登ッて秀吉の歌、万ざらでも惡くはない、

尤ともお側に細川三齋、れなじく幽齋、或ひは法橋、又は井上新左衛門といふやうな者がゐた、玄旨幽齋は本歌師でございますが狂歌も亦た能くした人で、或るとき近衛さまの前へ、細川三齋、幽齋の兩人がお目通りに出たことがある、三代も名代の歌よみ、幽齋は勿論、近衛さまは論をまたず、未だ御口誼もせぬうちに近衛公が、

近「細川貳つニュッと出にけり」

流石の三齋が頭を垂たぎり返辞がない、幽齋が取りあへず、

みゆきさし車の轍しぐれして
ほそかは二つにゆッと出にけり

大層近衛さまはお喜こびなすッて、

近「狂歌では幽齋だらふ」

と仰ジャッた、其の幽齋がれ傍にあッて狂歌本歌の御指南をする其處は信州堺目口の町、鞘師の新左衛門、苗字を井上と云つて、茶道の名が曾呂利といふ、誤まッて曾呂利新左衛門とよむ人もある、井上新左衛門曾呂利といふのが本來の讀みかたで、是れも亦た狂歌が巧みで、殊に滑稽奇妙に諷刺的の諧謔に長じて、秀吉が氣に入りで、新左衛門を傍ちかく招いで、

秀「新左、其方に扶持せんければ、生計に困るだらふ」

新「有りがたいお言葉ではございますが、別段能事もございませんから、扶持を頂だくわけに參りません、家事に追はれました節は、何かと願ひませう」

秀「然うか、夫れでは何日でも聞濟みつかはさふ」
新「有りがたき仕合せ」
と其のまゝになッてゐる、一日新左衛門、御前へ出て、
新「チト願ひ上げますることがございます」
秀「何ヂャ新左衛門」
新「一文倍増しを一月願ひます」
秀「何だ一文倍増しとは……」
新「一文の錢を一月間倍増しを願ひます」
秀「僅かのことヂャ許しつかはす」
トれ許しになッたが、成るほど一日は一文、貳文、四文、拾六文、
大層容易のことであッたが、一月合計となると壹百〇七万千七百

四拾壹貫八百貳拾四文になッた、叺に入れて馬につけると參駄半
あッた、秀吉が腹の中で驚ろいた、又た時として御前へ出て、
新「恐れ入りますが袋へ米を一ぱい頂だきたうございます」
秀「苦しからん」
ト秀吉が許す、五六日經つと藏奉行が顔の色を變へて、
藏「恐れながら大變が出來……」
秀「何ごとヂャ」
藏「新左衛門が袋にお米を頂だきたいと申して、藏へ袋をかけ
ました、お遣はしになりましたか」
秀「ッヒ言はんであッた、彼れは余が許したのヂャ」
藏「然やうで……間口が四間ばかりございます、奥行が貳拾間、

東側のお藏へ皆な袋の中にをさまりました」

秀吉も驚ろいた、新左衛門を呼んで、

秀「最早や其方には何もやらん、是れからは月々に纏頭を其方へ與せるである」

ソコデれ手當といふものが、毎月下されることになる、ナカ〳〵新左衛門奢ツてゐるから足りない、又た御前へ出て、

新「恐れ入りますが一つお聞濟みを願ひます」

實は秀吉も新左衛門の歎願には懲りてゐる、

秀「何ヂャ井上」

新「私しは奇病がございます、其の藥がございません、持病の發りました節高位高官の人の耳の香ひを嗅ぎますと治まりす

す、恐れ入りますがお耳を何うか嗅がして下さい」

秀「ハヽア、病氣が異ッたことなら治療も亦た變ッてをる、サア嗅げ」

新「只今は發ッてをりません、何れ發りました節願ひませう」

秀「然うか、何時でも苦しからん」

是れも亦た五十日忘れておしまひなさる、江戸内大臣家康が御機嫌伺がひに出る、お話しの稍や酣ならんとするとき、井上新左が膝をすゝめて、

新「恐れ入りましたが持病再發、一寸ッとお耳の香ひを願ひます」

秀吉も吃驚したが、許したといふ一言があるから致かたもないが

德川と話しをしてゐるところを、猫の初封面を見たいに香ひを嗅がれてはテト迷惑をする、然れども言ふたことを變改も出來ない不勝〳〵に、

秀「サア嗅げ」

ト仰シャる、喜こんで新左衛門お傍へ出て耳を嗅ひでる、家康が見ると、何かれ氣に入りの井上新左が、秀吉へ告げ口をしてゐるやうに思はれる、御歸邸の後ち金子千兩、榊原康政を使として井上新左の小屋へ持參させる、

榊「秀吉公の御前、宜しくお執成を願ふ」

ト言ッてやる、膝をたゝいて新左衛門、

新「久しぶりで訝な香いだッた、薩摩や加賀では嗅ぎ損になる

流石は家康だ」

秀吉が夫れをお聞きなすッて、

秀「新左衛門の爲ることは面白い、以來彼れの爲すまゝに任せろ」

其のうちに伏見の城が出來あがる、流石は老功の繩張で一點の批難もなく出來る、

秀「家で忌むべきは火であるから、火といふことを言ふたものは、身分に應じて罰金を申しつける」

ト秀吉から沙汰になッた、サア火といふ字を言はないと不都合なものだ、

甲「中村、其の烟草盆の炭の赤くなッたのを取ッてくれ」

話しをするのに餘ほど危險だ、然處へ遲れて新左衛門が出て、

新「當日は快晴、御機嫌の体恐悦に存じます」

秀「新左衛門か、延引いたしたではないか」

新「恐れ入ります……不思議のものを見ました爲めに遲くなりました」

秀「何を見た」

新「然やう……紫檀の○○くり貫の釜を見ました、如何にも宜い時代で、此の釜で湯を沸ぎらせたら面白からふと、ッヒ其の家に立ち寄りました、釜の熱る調べを致しました、ヤ、面白いくらゐな熱が致します、松風、颯、至極質が宜しく、夫れがために遲くなりました」

秀「ヤ、夫れは珍らしいことヂャ、併し側は紫檀でも底は鐵か鑄物であらふナ」

新「イヽエ、夫れが繰拔きで殘らず紫檀のみでございます」

秀「新左、僞わりを言ふナ、殘らず木では火へかけられまいがナ」

新「ハ、ハ、有りがたい仕合せ、若干の罰金を新左衛門へ頂戴を仰せ付られまするやうに……」

秀「余が何を申した」

新「紫壇の釜では火へかけられまいと仰せられました」

秀「ハヽア然やうか、又た新左にやられた、併し其の釜はあるのか」

新「イヽエ、有らふ道理がございません」

秀「何を申すのだ」

秀吉も果はれ笑ひ……何ぞも新左衛門に及ばない、彼れを一つ困らして見たいものだと、

秀「新左、余は猿に似てゐると申すか、其んなことがあるか」

とお問ひなすッた、是れには流石の新左衛門躊躇して、暫らく返辞が出來ない、秀吉は大層猿に似てゐたといふ説がある、又た一説には犬だ、犬面だと書いた本もある、猿に似てゐたのは、秀吉の跡へ出た関白だといふ、元服をして參内をした時に、雲の上人、中で歌の下の句を詠んだ者がある、

○「猿の頭に冠着せけり」

鷹司が取りあへず、

元服も未の刻を過ぎたれば

○○
さるの頭に冠着せけり

といふ歌らしいものになッた、夫れで猿の關白さまと言ッたといふ噂さがある、併し多く世の中の人が秀吉を猿面だといふから、

狂げて秀吉を猿にしておきます、似てゐるものを似てゐるとは言ひにくいものだ、暫らく新左衛門考がへてゐたが、頭をあげて、

新「イヽエ似てをりません」

秀「ナニ、猿には似てをらんか」

新「然やうで、猿には似てをりませんが、猿が幸はひを得て貴君に似てをります」

秀吉が落膽した、夫れでは蛸口に金さんの議論で、何方が似ても同なじこッた」

秀「然れば新左、余に似た猿を搜し出して連れて來い、一月の暇をつかはす」

お納戸から千兩遣ひ捨が新左衛門に出る、口から高野と言ふか、今更ら新左衛門も跡へは引けぬ、先づ猿の居さうなとこを探るより致かたがない、丹後の國興謝郡の山家へ乘り込み、獵夫の家を叩いて、脊丈の壹尺五六寸、眼の丸い顏の赤い口の尖ッた、鼻の低い耳の小さな猿はないかなと、猿相書をつけて取調べがある、興作といふ獵夫のところに白い毛の猿が數年飼ッてある、人馴れてゐるから此れが宜からうと、二百兩で無理所望に讓つて貰ッて」

速れて歸る、秀吉に御覽に入れると、膝をたゝいてお喜こび、

秀「余が是れか、是れが余か、鏡の室の鏡は入らん」

トあッて、伊木丹後守へ猿の餌が五百石ついて、世話料が二百石ついてお預けになる、又た彼れに一寸と人の言葉が解し得ると見ゐて、お手廻りの小用が足りる、併し夫ればかりでは面白くないから、袋竹刀をこしらへて猿に持たせ、秀吉が、

秀「猿」

ト仰しやると、其の竹刀を持つて、駈けて行ッて、お禮に出た諸侯の頭を打る、加藤、福島、片桐、池田、皆な猿に毆打されざるものはない、無禮な奴だと怒ッて見ても、秀吉の生うつし、是れを擲き打つといふことも出來ない、諸侯の迷惑が鼻　ブラ下るの

秀吉が愉快がッて、在坂の諸侯は大概打たれる、然處へ久しぶりで青葉山中納言政宗が出る、機嫌聞きに來たといふ、秀吉心のうちに、明日は愉快だぞ、政宗を打らしてやらふと心かまへをしてゐる、政宗は伏見へ來るや否や此の噂さを聞いて、

政「是れは是れは惡いことだ」

ト其の晩伊木丹後守のところへ、金を千兩土產に持ッて來て、

政「丹後どの、甚はだ恐れ入ッた願ひだが、秀吉た氣に入りの老猿、一寸拜見を願ひたい」

丹後守も人に見せるわけには行かないのだが、千兩といふ鼻藥もあり、否やだとも言ひかねる、

伊「此れは拜見の成らんものだ、然れば私しが便所へ參ッてゐ

るうちに御覽になるやう」

ソコデ丹後守が坐を起ッて、政宗檻の前へ行ッて見ると、赤い絞りの衣服を着て、猿はすましたの顏をしてゐる、覺えてゐろと言はんばかりに政宗は、己れの顏を猿に突きつける、借りて來た鍵をもッて錠を閉さ、襟首を取ッて前へ引つけ、疊へ鼻を擦りつけること二三遍、拳を固めて一つ打ッて檻の中へ投り込み、其のまゝ濟まして屋敷へ歸る、翌日出仕をして御機嫌を伺がふ、仕濟ました顏で秀吉は傍にゐる猿に、

秀「猿」

ト号令が下る、例の袋竹刀を取ッて猿が駈けて行き、打たふとして顏を覗くと昨夜の今朝だ、幾ら忘れッぽい畜生でも未だ忘却は

しない、アー此の人さんだ、昨日痛い目に逢はせたのは、と竹刀を擔いで逃げて歸ッて來る、秀吉がハテナと思し召して、チト大きな聲で、

秀「猿、猿」

ト仰しやる、猿も板挟みで、出かけなければ、飼ッてくれる殿さまの機嫌を損じるだらふし、打たふと思ふ其の人も酷い目に遭ッてゐるし、誠とに辛い位地だ、だから猿が愚痴を言ッて、昨日の日没に此の人に酷い目に遭ひました、夫れを打てと仰つしやるのは

○○さるとは辛いねッてへな事を仰しやいましたか子

といふのは、今もッて流行謠で、秀吉は其んな内情は御存じない

政宗の勇猛畜生にまでおよんだりと忝く御賞美になッた、他の侯は打られ損、政宗は打ッて却ッて賞められる、智慧の有ると無いとは是れほどの相違、とは言ふものゝ全くは秀吉の想ひ違ひから、政宗の僥倖と成ッたといふ、ホンの壹席の讀切り講談」

飛入り相撲

桃川如燕講演
石原明倫速記

偖て滑稽相撲の間違ひの壹席を伺がひます、播州千鳥の濱の相撲尤とも此れは素人相撲でございます、其の前に大坂で興行をいたしました時に、源氏潟、又は花筏、天秤、猫又、是れは江戸の脱走相撲でございまして手打ちをいたしました、雨天つゞきの爲めに借金が大層出來ました、化粧廻も何も質入れいたしまして、何うすることも能いません、然處へ播州千鳥の濱へ、祭禮について三日の相撲を買ひに來ました、

源「ヤ、筏」

花「ハイ、只今戻ッて參りました」
源「最前から我が身を尋ねてをッたのだ」
花「ハイ」
源「何處へ行ッてをッたのぢや」
花「歩行かなければ悪いといふから、一生懸命に歩行いてをッたが、モウ痛うて〳〵及はない」
源「大層顔の色が悪いが」
花「兩横根でございます」
源「筏、喜こんでくれ、實は借金で動くことも出來んのだ、然處へ千鳥の濱から三日の相撲を買ひに來た、夫れについて若手では我身が目的だ、行ッてくれ」

花「ハイ、親方さん、參りたうはございますが、此の通りの横根ぢやア歩行くのが漸う〳〵ぢやから　相撲も何も取れやせん」
源「夫れは困ッた、何うにか工風をせんければ成らん、待て待て、何ないになッてをるか見せい……成るほど是れぢやア行かれん……アー宜エことがある、行かんでも宜エ」
花「親方さん、怒ッては可ん」
源「イヤ、怒りはせん、行かんでも宜ゑ」
大黒橋の橋詰五軒目に援灯屋の七兵衛と言ッて、肥滿てをる色の白いところが花筏に能う似寄ッてをります、其處へ源氏潟がやつて來て、

源「七兵衛さんや」

七「此りやお關取、能うお入來、此ないに雨が降ッちやアかないません」

源「時に七兵衛さん、貴君へ頼みがあるが」

七「ハア、何でございまする」

源「一日此ないに提灯を貼ッてをッて何ぼになるか知らんが、貴君に一日三歩づゝ進げる、何うぢや私と一緒に行ッては吳れんか」

七「一日三歩といふたら豪いものや、何ないな提灯貼るのや」

源「イヤ提灯ぢやアない」

七「何でございます」

源「實は筏がなア、雨横根で播州千鳥の濱へ行かれんのヤ、私ア借金のために動けん、花筏を先方で目的ヂヤ、夫れゆゑに筏が行かんといふたら先方で金を出さん、力士にあるまじきこッチヤダ、三日俗ッ誤魔化すのヂヤ、筏の代りや」

七「阿呆らしいことや、其ないなことは出來まへん、迚も行かれません、私此ないに肥滿てをるのは力があるのヂヤ有りません、病ひのせいで腫むでをるのや、是ればかりのぽんち(子供)にドタリ〳〵と投り出されます、行かれません」

源「ハヽヽ、相撲を取るのなれば行かれんヂヤらふが、相撲を取らんでも宜エ、只だ土俵入りばかりしてくれゝば宜エ、相撲を取るのは私が取る、其の上、猫股、天秤、若林、此の邊

が皆な取る、夫れゆゑ土俵入りだけで宜いのヂャ」

七「ハア、一日三歩チャナ」

源「アヽ」

七「纏頭は何ないになる」

源「纏頭は幾ら貰ふても山分けや」

七「ハア、何ぼ貰ふても山分け、白兩貰へば五拾兩、千兩もらへば五百兩、壹万兩貰へば……」

源「阿呆らしい」

七「宜うがす、參りませう」

源「其處ヂャ」

七「ハア」

源「關取の代りになッたのぢやで、關取らしい返辞をしてくれんければ困る」

七「關取らしい返辞とは何ないナ……」

源「關取と言ッたら、重々しくオイイ、斯ういふ返辞をしてくれんければ困る」

七「豪い六づかしい……矢張り是れも三歩のうちに籠ッてをるのやナ、マ貴君呼んでみなはれ」

源「お關取」

七「ウハイ」

源「夫りャ可かん、オーイと太い聲を出しなされ」

七「マ何うにかやッて見まはう」

と、播州千鳥の濱へ乘り込んで參りましたるときに、サア祭禮ではございますし、花籠をもッて揚々と迎へられる、充分人氣を取り、彌よ興行する初日大入り、然るに千鳥の濱の名主の悴で、千鳥山龜吉と言ッて飛び入りに這入ッてをります、此の者の強いこと、初日は天秤が對ひ負けました、二日目に猫股が打つかッて負けて三日目に、源氏潟藤吉と顔合せになッた、然るに源氏潟が大概投げるつもりであッたが、矢張り負けてしまつた、餘りお客が多いもんでございますから、二日の日延を約束をいたして跡金を半分受け取りました、三日目に源氏潟が負けて、第四日目になりますると千島の濱に花筏ト顔が合たのに驚ろいたのは提灯屋、

七「親方さん」

源「何ぢやエ」

七「アー今日は貴君負けやはッたなア、貴君さへ負けるものを私は迚も及はん、彼の千鳥の濱の眼を見なはれ、鷹のやうな眼をして、摑ッたら殺されてしまふ、私一日三歩は豪い結構やが、一命をしまふたら何もなりやへん、私是れから戻ります」

源「マ、待ッてくれ、貴君が相撲を取らんければ、私は腹を切らんければならん」

七「夫りや貴君は腹でも何でも切りなさい、迚も私相撲は取れまへん」

源「夫れがサ尋常では取れやせん、世間への義理、取る眞似ヂ

ヤ、過失負けをしておくれ」

七「けが負け……私負傷でもするのかい」

源「イヽヤ、土俵へ上ッて形のごとく仕切り、起ちあがッたら宜ゑか、突然先方へ打つかんなされ、一寸と指の先きが打つかッたら尻持ちを突きなされ、夫れで濟んでしまふのや」

七「ハア、打つかつて先方へ、一寸ッと手が障つたら尻持ちをつくのやア、若し摑まッてしまうたら尻がつかんが」

源「片膝をつきなされ」

七「ハヽア、是れは仔細はないことだ、已れの尻をつくのヂャ若し摑まッたら膝を突くのぢや、アー其ないなことなら負傷負けをしまはう」

約束がスッカリ定りました、然るに播州千鳥ヶ濱の名主の悴が相撲を取ると大變な評判、ソコデ名主のとこへ親類が集まります、父さんの怒り一かたならず、

父「龜吉是れへ出ろ」

龜「ハイ」

父「コレ、名主の悴が相撲を上手になッて何うする、其方が眞實に勝つと思ふか、先方が稼業上手、其方に勝ッては此の相撲が大入にならんから、態と負けるのだ、夫れを眞實に勝つと思ッて、宜いことにして相撲を取るなんといふは馬鹿だ、土俵の上で殺されても下手人は取れん、其んな馬鹿な悴は持たん、相撲を取るやうなら勘當をする、サ是れから相撲を取

るか取らんか何うだ」

龜「ハイ、何うも御心配をかけて相濟みません、此の後ち必らず相撲は取りませんでございます、見物だけはお許しを」

父「見るのは勝手次第、決して相撲を取ることはならん」

相撲を取れば勘當と事を定めました、源氏潟は提灯屋が明日ら○○く相撲を取ってくれゝば宜いと思って臥りました、其の晩子刻過ぎ小用に參りますと、庭で、

○「ヨウ……」

ヅシリ、

○「ヨウ……」

ンシーリ、かけ鋤と響きがする、

源「何ヂャい」

ト來て見ると、提灯屋七兵衛が眞ッ裸体になッて庭の松の木に打つかッてゐる、

源「ヤ、何うするんヂャい」

七「稽古ヂャ」

源「負ける稽古をする奴があるものか」

夜が明けまするとゾロ〳〵見物山のごとく、千鳥山は表へ出て相撲の容子を見て、

千「私が取らんければ相撲場は割れッかへるやうだらふ、

甲「ヤア千鳥山關、千鳥山關、今日は貴君の相撲を見に行くのだ、昨日源氏潟を投げた手際は感心なもんジャな、今日は確

かりやッておくれ」

ゾロ〳〵參ります、

千「ハテナ、私が相撲を取らなければ宜い、今日行ッて今日は取らないと、驚ろかして見物を涌かしてやらふ」

止せば宜いのに相撲場へ參りますと、

甲「ヤア千鳥山が來た」

乙「千鳥山が來た」

といふ騒ぎで、溜りへ這入り見てをりまするうちに段々番數が濟み、千鳥山花筏と呼びあげられた、

龜「ア、斷わる事を忘れちまッた……此の千鳥山は今日は相撲は取れん、少しく仔細あッて相撲は取れん」

甲「何言ッてゐるのヂヤ、モウ呼びあげられて、取れるも取れぬもない、サア〳〵上んなさい」

見物は、

甲「千鳥山ア……千鳥山ア……」

乙「花筏ア……」

ウワアッワッといふ、双方とも土俵へあがりまする、千鳥山は、エ、勘當になッたら成ッた時だと度胸をすゑた、花筏は、ア、豪いナ、何うかうまくやりたいナと泣きッ面をして上りました、双方手を下して、

千「未だよ」

千鳥山は仕切ッて先方を見ると、花筏は兩眼を閉ぢてをります、

提灯商は眼を開いてゐると恐ひから、目を眠ツて時々にヒョイヒョイと見て、

花「豪い眼をしてゐやはるナ、鷹の眼みたいナ、遣りろくなッたら殺されてしまふ、アヽ慾ばッたばつかりに一命がなくなる、南無阿彌陀佛、〳〵、南無阿彌陀佛、〳〵〳〵」

口へ出しては申しませんが、腹のうちで斯う思ッて南無阿彌陀佛と言ッてゐるうちに、ッヒ

花「南無阿彌陀佛」

「ト一言出た、千鳥山は是れを聞いて驚ろいた、

千「斯りャア大變だ、親の意見を諾ずして土俵へ上ッたが、親

父の言ふ通り稼業人の腕は此んなものだと、今日は生命がけの勝負をする積りか、已れを投げ殺す了簡で南無阿彌陀佛、〳〵〳〵と言ッてるんだ、ャ、飛んでもないことになッた、親の罰が當ッたワエ、今さら土俵を下りるわけには行かず、已れは生命がけの勝負をするつもりヂャアない、南無阿彌陀佛、〳〵〳〵、〳〵〳〵」

藤「ハヽア、先方でもやッてをるワエ、南無阿彌陀佛、〳〵〳〵」

行司が眞ん中へ這入ッて、

行「此んなに氣の合はない相撲てへナない」

面倒と思つて

行「はッけよいや」
ト軍配を引いた、

花「ヨイショ」
ト立ち上ッて提灯屋の花筏が飛びかゝッて參りますと、眼を開いてゐチャア恐いもんでございますから、眼を閉ぢて飛びかゝりました、右の手が千鳥山の右の乳のとこへ、左りの手が顔へ行ッて拇指が鼻の穴の中へ這入つた、千鳥山は氣れくれがしてをるところへ、立ち後れをした揚句に鼻へ指を突き込まれたから、ドターンと千鳥山ゞ轉覆かへッた、筏花の七兵衛、倒れやうと思つてヒョイと先方を見ると、先方が轉覆かへッて居る、デ、倒れるわけには行かず、頭を掻いて據どころなく引込んで參りました、團扇

は花筏に上ります、看客が、
看「ウワア……花筏ア……、豪いもんヂャナ、素人を負かしたてへんで、アノ間の惡さうな顔をして頭を掻いて引ッ込む、
稼業人は違ッたもんヂャ」
千鳥山は大失敗、此んな間違つた相撲てへナないものだ、其の後ちに千鳥山龜吉、親の勘當を受け、據どころなく相撲取になッて飯を食べやうと源氏潟へ尋ねて參り、弟子にして貰ひたいと話しをいたしました、早速源氏潟、承知はいたしましたが、
源「先達てお前の負けたのは、眞の花筏清吉ではない、實は提灯屋七兵衛だ」
聞いて千鳥山は怒ッた、

千「間違へば間違ふものヂャ」

一時は笑ひましたが、後に至つて此の千鳥山が、江戸相撲のうちで小結まで昇りました、併し間違相撲の一席は是れだけのことでございます」

飛入り相撲終

昆寛の小柄

松林伯鶴講演
石原明倫速記

夫れ美術は國の寶と言ッて識者は是れを尊敬せられます、美術の區域も至ッて廣きやうなれど、幕府未だ盛んの頃ほひ、四ッ谷刈豆店と申すところに昆寛といふ彫刻師あり、緣頭さては目貫、小柄等にれいて名高い、然れど腕前の優れしにつれて仕事をするは稀れでございます、女房をお兼と申し、夫と共に貧苦の活計をへ。

○ポ相持ちとやら、或るときお兼、夫の傍へ進みまして、

兼「お前さん今日も休みかへ」

昆「然うよ、職人と澤山さうに人に言ふた、野郎は死んでも彫

た仕事は後世に殘る、用ひれば虎のごとく、用ひなければ鼠
とやら、氣の向いた時の仕事の出來は、我が身ながら格別宜
く出來たと思ふ、人は一代名は末代、後世にのこす仕事を立
派にやッてよ、何うか昆寛の名を殘してへと思ふのだ、今日
も氣が向かねへから休むんだ」

言はれてお兼は不勝〳〵、

兼「困ッたねへ、れ前さんは冥利が盡きるよ、世間の職人は仕
事がなくッて、暇だ〳〵と口説くのに、有り過ぎるれ店の仕
事を捨ておくとは何うしたものだ、夫れも亭主の好きな赤烏
帽子、妾シャア我慢もしませうが、モウれ米は盡ちまッたよ」

昆「フウーン」

兼「お味噌も盡れたよ」

昆「ヘエー、然うか」

兼「炭薪も盡れましたよ」

昆「能く盡れやァがるナ、夫れでも何か盡れねへものはねへか」

兼「夫れはあるけれど、心細いよ」

昆「何だ、盡れねへものは」

兼「きれないものは手、出刀に菜ッ切庖丁に鋏に髮剃、研職に
かける錢があれば、れ米を五合買ッて呉るんだよ、妾も和姦
の夫婦ヂャアなし、米飯を食べまいといふ約束で緣付いたの
ヂャア有りませんよ」

昆「夫りャア然うよ、食はせねへといふ約束で已れも貰やアし

ねへ、夫婦は二世、苦樂は倶、手前一人が食はねへで飢だるひ思ひをするではなし、已れも矢ッ張り腹は空ッてる、モウ二三日我慢をしろよ、氣が向けば仕事をするよ」

云ひはなして粉な烟草を烟管の火皿ですくひ、無頓着なる夫の姿烟草くゆらす横顔に言ふに言はれぬ無量の愛敬、妻はほと〳〵困じ果て勝手のかたへ立ち去りました、何思ひしか昆寛は、膝をたたいて一疊の仕事場に立ち入り、コッ〳〵彫刻を始めました、時に其の日は麗らかにて、雲井遙かに田鶴の諸聲、丁度家根職が兩人、得意然と大胡坐をかいて、コッ〳〵釘を打ちつけます、然處を下でもコッ〳〵、偶然調子が合ひますと、職人氣性の初五郎、鐵槌を家根へ投げ出して、

初「伊三公、仕事を休め、此んな巫山戯た家へはねへ、僅か子供の戯ぶれと我慢をして仕事をすれば、先刻から休みなしに此方とらの眞似をして、コッ〳〵やヤりアがる、迚も仕事はやりきれねへ、マア休んで一烟草吸ミヤア」

伊「イヽヤ兄貴、お前の眞似をすると思ひなさるが、誰れしも渡世は相み互ひ、此處の家は昆寛といふ彫刻師の職人だ」

初「何だ彫刻師……昆寛たア妙な名をつけやアがッたなア」

伊「然うよ、已らッちにも分らねへから家主さんに聞いたらのウ、昆布の昆の字に、四文錢の寛永の寛の字を書いた名だとよッ」、

初「エーコウ、此方とらア字のことなんざア知らねへが、昆寛

なんたァ何の体だ、全で狐が鉦たゝきをしたやうな、變てこな名だなァ」

兩人の家根職が聲高に家根の話し、洩れ聞ると昆寛は、折角やりかけた仕事、止めて腕拱ぬき、家根裏を屹と打ち眺め、

昆「ヤ、此いつァ妙だぞ、天に口なく人をもッて言はしむる、違へねへ、昆寛とは狐の鉦たゝきだ、是れまで鬼の念佛は御注文で刻ッても見たが、狐の鉦たゝきは初めてだ、ウン然うだ、一世一代の傑作をやらふ」

ト獨りホク〳〵打ち諾づき、三尺帶を締めて爪掛けの麻裏、四ツ谷御門外の尾張屋といふ刀劍商へ參りました、揉み手をしながら小腰を屈め、

昆「へエ番頭さん、何うも御無沙汰、旦那まことに濟みません オ、〳〵坊チャンは大層大きくれ成んなすッた、お涎か垂れます、母チャンにチン〳〵(鼻汁)をかんでれ貰ひなさい……エー時に旦那、刈豆店の昆寛、一世一代の彫刻をやりますから、資金を壹兩お貸し下さいまし」

言はれて主人は片頬に笑を含み、

主「親方、宜い腕を持ちながら懶惰るにも事を欠いて、全で休み同樣だ、仕事にかゝるといふなら前貸は厭はないよ、尾張さまや出羽さまから御注文の催促で、申しわけに實に困る、番頭壹兩出して進げナ」

番頭由兵衛の持て來る金を受け取ッて、往來へ出ると、暫らく姿

が見えません、如何せしかと思ふ間に、物置から味噌樽の篋を持ち出し物干竿に縛りつけ、荒縄を五六尺に切ッて馬連のごとく結び下げ、海苔巻縮、稲荷鮨なぞを求め來り、近所の子供を狩りあつめて、

昆「サアよ、皆な伯父さんと一緒に、王子の稲荷さまへお詣りに行きなせへ、彼地へ行ッてれ鮨と團子は御馳走をするよ、皆なよ、れ前ッちは消防夫だよ、此の伯父さんが纏いだ、夫らい、アラ、、、、、、

言ひつゝ先きへ駈け出します、てんと面白しのわんぱく小僧、跡に續いて馳せ去りました、尾張屋の見世先きへ黒山の人立ち、

主「チエ番頭、昆寛は彫刻物は上手に違へねへが、氣風がチヨ

イと變ッてゐるよ、いよ〳〵氣じるしとお出でなすッた、王子まで眞實に行くのかしら、妙なことを……」

ト目引き袖引き打ち笑ふ、昆寛委細頓着なく、疲れし足を引ずりながら、王子稲荷へ參詣なし、空腹の子供には燒團子と持ッて來た鮨を與へ、神前へ額ついて祈誓をかけ、腰の矢立を拔き取るが否や、先づ王子稲荷の社の棟と鳥居の頭を朧げに春霞の中に現はし、已れを親狐に下繪を見立て、尾づゝを持ち添へ、鰐口を半鐘に象ぞり、手をかけるの圖、小狐は嘴口を擔いで戯ふれるの圖、先づ一ト通りの狐の鐘たゝきの新圖を發明いたしました、然れど火災は社會のために大不吉、火は延びるを性となすゆゑ、陰の水を象ぞるところが無ければならぬと、翌日又た〳〵尾張屋より壹

兩の金を借りうけ、今日は子供を連れて、芝浦へ潮干狩に出かけ親狐小狐の最と快よく漁りする体を、生けるがごとく下畫をこしらへ、我が家へ歸ッて女房お兼に向ひ、

昆「いよ〳〵手前、大金利益が來たよ」

兼「然うかい、夫りやァ有りがたい、別にお金も入らないが、何うか三度〳〵飯だけは頂だきたいよ、表の釣瓶井戸の音が腹へ響いて立ちきれないよ」

昆「然うだらふ、已れも潮干に行ッたら、足がフラついて歩行けなかッた、今日からは精進潔菜、仕事の出來わかる間だ夫婦の交はりは成らねへゞ」

兼「ウン成るほど、可笑いチエ、三日も以前から飯を食べず燒

薯で忍んでゐるし、上下とも口の禁制は、近ごろ馬鹿氣た話しだよ」

女房も夫の仕事を見るにつけて、イソ〳〵と嬉し氣に勝手元を働らく、此の仕事十二日目にて出來あがりました、素銅へ狐の鐘たゝき、裏に狐の潮干狩、壹挺の小柄、鬱金の布に包み、得意氣に尾張屋へ持ち參り、是れを出だしましたゆゑ、見世中額をあつめて見ますれば、成るほど彫刻は近來の傑作と見ゆれども、貸した貳兩は殘らず運動費に、半月暇をつぶしたとあッては、迚も直段も折り合ふまいと存じて、

主「親方、大層能く出來たが、少ッと當店ヂャア見分けが付かねへから、何うぞ他店へ持ッて行ッて呉んねへ」

言はれて昆寛面膨らせ、

昆「宜うございへやす、お見分けが付かねへなら、他店へ持ッてめへりやせう」

頬ふくらして往來へ立ち出で、其の頃はひ繁昌を極めた刀劍商多き其の中で、麹町三丁目の老舗と言はれた、伊勢七かたへ持て參りますと、莫大の費用かゝりし品と知らず、見れば美ごとの小柄の出來、

主「親方、久しぶりだねへ、今日は珍らしい品を持ッて來たねへ銘をきらずに、狐の鐘たゝきで、刈豆店の昆寛が利いてるねへ」

昆「然やうですよ、何んなものです直じるしは」

主「親方、一つ貳歩に引取つて置かふよ」

昆「へエー、只だの貳歩ですか」

主「貳歩ぢやア餘ほど張り込んだ、高が素銅で價値がないけれど、彫刻が宜いから買つてれくんだよ」

昆「成るほど、彫刻が氣に入つたと言はれちやア此方も職人だ豪勢有りがたい、賣ッちまへ」

とシャン〳〵手をしめて、金受け取ッて我が家へ大手を振つて立ち歸りました、

昆「サアお兼、米でも味噌でも何でも買へ、尾張屋さんから貳兩貧金を借りて、半月で彫刻あげた小柄が、貳歩といふ宜い直に賣れて來たから」

言ひつゝ、金を投げ出せば、餘りのことに女房は開いた口も塞がらず、

兼「お前さん、此りや半月かゝッて、壹兩貳歩損をしてゐるよ」

昆「何だ損だ、待ちナ……」

考げへて見る、

昆「ハテ、違へねへ、職人は割に合はねへもんだなア」

無頼着なる顔つきに、流石の妻も愛想を盡かし、其のまゝ戸外へ出て行きました、黄昏告ぐる鐘の聲、點燈ごろにも油はなし、薄暗がりに心細くも、縁も薄き四布蒲團、五月ならねど柏餅、只だ一人で寐込みました、翌日になつて朝未刻ごろ、

久「お頼申します」

訪なふ聲に、腹を抱へて昆寛が立ちあがり、見ると媒妁人の八百屋久兵衛、連れ歸ッて女房のお兼は後に從がふ、

昆「此りやア久兵衛さん、大層お早い、サアお上んなさい……お兼、マア手前、昨夜何をしてゐやアがッたんだ」

久「イヤ親方、夫れは此の久兵衛からお話しをする、泣いてゐないで此方へ上んなさい……偖て改めて言ふぢやアないが私も他人さまの娘を乾物にしてお貰ひ申したいと媒妁人は致ない、餘まり親方が呑氣すぎるので、飽きも飽かれもせぬ中なれど、暇をとらねば乾し殺されると、言はれて見れば致かたがない、是れまでの縁と斷念て、持ッて來た品物だけ、何うか親方揃へて下さい、決して惡く思ひなさんナ、自業自得

と諦らめなさいよ」

言はれて見りやア昆寛も、万更ら先きが無理でもなく、

昆、宜うがす、然う定ッたら暇をやるから、宜いところへ嫁入りするゞ宜い」

押入の中を掻き廻して、鏡臺針箱小風呂敷に掻きまとめてゐる、

折りしもあれ伊勢七の番頭、息を切ッて中へ駈け込み、

番「今日は親方……オヽお客さまですナ、早速申し上げますが私方の旦那が來るとこだが、敷居が高くて氣まりが惡い、手前先きへ行ッて來い、此の目錄ニヤア拾兩金が這入ッてゐる此りやアお詫の印しの肴代ですよ」

言はれて昆寛首を捻り、

昆「へェー、夫リヤア謝たァ何です」

番「なアに月六さい、日本橋万町の拍木の古道具の市へ、今朝旦那が行ッて、親方の小柄を並べておくと、根芋横町の喜兵衛さんが八兩に直をつけた、スルト漸々皆なが騷あげて、貳拾五兩の聲を聞き、旦那は驚ろいて駕籠で歸つて來ました、是れほどの品物を、僅かの二歩とは付けるも付けたが、賣る人も賣る人、飛んだ御名譽へ瑾をつけた、又た此の品が百兩に賣れゝば、此方も渡世だ半金は利益、殘り半分は此方へ差しあげる、何うかお謝びをしてくれと、神棚へ燈明を上げ、親方の小柄が供へてありますせ」

言はれて昆寛座りなほし」

昆「其いつア有りがてへ、ソロ〳〵運が向いて來たやうだ」

涙に交る水ッ鼻汁を豆絞りの手拭で振り拂ひ、肩怒らして咳拂ひをすれば、腹へ響いて堪へられず、其のまゝ番頭は立ち歸りました、

昆「サア八百屋の久兵衛さん、飛んだお待ち遠だッた、直に荷物を引取ッてお呉んなせへ」

言ふとお兼が媒妁人の袂を引き、

兼「チエ伯父さん、此りやア少と模樣が變ッて來ましたよ、此れぢやア飯も食べられさうだから、此のまゝ置いて歸ッてくださいよ」

久「ウン　ウン、違へねへ、已れも然う思ッたところだ……チエ親方、元は小柄が苦情の種、夫れが直賣りが出來れば、ざこざなしで宜いチャアねへか」

言ふのを昆寛、拳の先きで鼻汁をこすり」

昆「戯談言ッチャア可ねへ、私チャア子供の時から講釋が好で、荒木横町でも聞いてゐるが、大公望の直ぐなる針、又たお兼だッて、錢のあるときおでゝこ劇場へ一緒に行つたら、後藤の生醉を見たチャアねへか、今なりし鐵砲は、陰に離れ陽にされ、後藤が現はす大器量、もと〳〵通りに成りてへとて、女子と小人養なひがたし、女房に離縁された已れは昆寛だ、成らねへ、何うか連れてお歸りください」

ト其のまゝに追ひ出しました、然るに夕がた伊勢七の主人は袴羽

織、駕籠を壹挺釣らして參りました、慇懃に手をつかへ、

伊「親方、何にも言ッて下さるナ、私のお影で飛んだ家内紛紜をさした、男孀に蛆がわく、何うかねへ、私の養女を一人嫁にあげたい、今夜が吉日だ、内祝言をして貰ひたい」

昆「ヘエ然うですか、又た今朝ほどは澤山のお肴代、色々御心配を受けました、家の女房は出て行ッたから不自由だが、今夜と言ふなア餘まり急ですなア」

昆「イヽヤ、其んなことは言はねへで、御承知なされば簞笥長持夜具蒲團表へ釣臺が三棹來てゐる」

昆「ヘエー、其いつは驚ろいた、其んなものを持ッて來たッて座敷が狹くて置場がございません」

伊「ナニねへ親方、隣りの明家は家主から借りましたよ、疊は十一通りの筋縫いで、新床が皆な這入ります」

昆「ヘエー、此りや夢だろ、狐の小柄が元となッて、此いつは又た魅まれてるナ」

伊「ナアに親方、心配は入らねエ、皆な這入れ」

といふうちに、小僧、番頭、取り交せて十七八人、

甲「ヘエ親方、れ目出たう」

乙「ヘエお目出たう」

ゾロ〳〵這入ッて來る、其のうち、綿帽子を冠ッたる婦人、足の運びもしとやかに黑紋付の裾摸樣、白襟の花嫁、昆寛ギョッとして、

昆「ソラお出でなすつた、アーラ我が君侍るなりとくる質だぞ
伊勢七の旦那、お茶番は大概にしてお吳んねへ」
伊「イヤ私は、親元なり媒妁人なりだから、先づ三々九度の眞似事を」
ト人の勸めに辞退もやらず、夢の浮世に現で終る、人間一生の槿花一日の榮、何うなるものかと婚禮の眞似こと、
伊「イザれ床入り」
トいふとき、うら耻かはしげに花嫁は綿帽子を拔ぎ捨てる、互ひに見かはす顏と顏、
昆「此ん畜生、手前はお兼だナ、何の眞似をしやアがるんだ」
兼「イヽエ親方、是れには段々仔細あること」

ト言ひ說く傍から伊勢七の主人、
伊「お前さんの彫刻あげた、後世に殘るべき美術の品を、私しは貳歩に買ッたから、夫れで家内に波風立ち、別れ話しも元は私ゆゑ、其の小柄の糶賣りも、百とせ千年万町、アノ柏木で直が出れば、別に苦情はねへ筈だ、兩人の間だに子でもあれば、此んな苦情はお茶の子だが、其處が互ひに子なき同士、小柄が苦情の別れ話しも、小柄を夫婦のかすがひに、あげて媒妁つ此の伊勢七、幾千代かけて睦ましく、何うぞ消光して下さいよ」
其の場を無事に治めたる、是れぞ昆寛一世一代、世に知られたる傑作の小柄、當時華族佐竹侯の御寶物になり居るといふ、昆寛小

柄の由來の滑稽一話、是れにて結局

昆寛の小柄終

水飲みの龍

蓁々齋桃葉講演
石原明倫速記

エー名人の甚五郎利勝の刻みましたる龍のお話しを一席伺がひます、併し甚五郎といふ者も何代もございますが、其のうちに刻んだものが名高いといふのが、飛彈の山添から出ました、農民甚左衛門の悴甚五郎といふ、此れは工の弟子でありまするが、抑も此の初代甚五郎は、京都今出川のお大工棟梁玉園の弟子で、是れは一人異つてをります、此の人の墓は三井寺にありまして、此の甚五郎は京都の中雀門を建てまするときに、十七の菊を彫りました何故十六に彫らんと尋ねられたるときに、無位無官にして十六の

菊は恐れ多いと申しました、至つて宗門に凝つて顯如上人の最負を受けた、又た元祖工は木曾の生れにいたして女房をお大と云ッた、木曾の八拾間の棧橋を架るときに、明治の今日なら何でもないが、其のころ更に橋杭が持ちません、然るにお大に事情を話して、

工「大工の御神と祀るによッて、何うか人柱になッてくれい」

ト頼みまして、八拾間の棧橋を女房を人柱に入れて是れを留めたといふくらゐ業体に凝ッたる人物、然れば大工の棟上といふときに、髪または五色の布をさげ、鏡、扇、櫛、笄などといふのを附けますのは、工の女房れ大を祀りますものださうにあります、偖て五代目は至ッて犬死でありまして、其の三代目の工といふ人の

弟子に、後年に至ッて名前を殘しました甚五郎利勝といふ、此の人の刻んだものが澤山ありまする中に、扇だけの坊チャン方でも嬢さん方でも能くお話しがある、上野の鐘樓堂の龍といふ、是れは三代將軍家御建立でありまして、綸言は汗のごとく、上意は風のごとく、流石は三代の源君、鐘樓堂の高欄へ取りつけるところの四方の龍は、

君「日本の龍は名人に彫らせろ、龍の昇天する形ち」

トいふ上意だ、早速日本國中を取調べるといふと、上手はあるが名人は足りないものだ、名人は上手の上を一のぼり、大坂道頓堀に吉兵衛といふ者がある、是れが龍の名人だ、大坂吉兵衛といふ夫れから野州佐野天明に善兵衛といふ大工、是れも龍を彫らして

は豪いもの、又た江戸表に壹人あッたは、神田皆川町に乱心源太郎と言ッて、狂人ではないが、仕事にかゝッたときは何を言ッてもお通じなし、

甲「彼れは仕事にかゝッては狂人だ」

といふ、ソコデ人呼んで是れを乱心源太郎と言ッた、爰に調べて見たところが龍の名人が三人ある、四方の高欄へ取りつけるには今一人なくては不都合だ、寧そ貳人なら貳ヶ所づゝ彫らせるが、三名といふんでは都合が悪い、或日大久保彦左衛門登城いたしまするとと、三代將軍家、

將「彦左」

彦「ハッ」

將「サテ斯やう〳〵で、今一人龍の名人を調べてをるが、其方に心あたりはないか」

此の折り彦左衛門、

彦「恐れながら家康公、濱松より御持參に相成りましたる、紅葉山の片邊りにありまする八重櫻の大技、女中が過まッて、お成當日に折りましたところがございます、此の際淺草諏訪町の大工棟梁、政五郎かたより仕事にかゝッてをりました甚五郎利勝と申しまする者、繼木をいたしましてれ目通り仰せつけられましたが彼れへ仰せつけられましては如何でございます」

將「オヽ、余は殆んど忘れをッた、成るほど彼れは名人ぢや、

然らば早々彼れへ申しつけい」

彦「委細畏こまり候らふ」

彦左衛門お受けをいたして下城におよび、早速諏訪町の政五郎へ沙汰をいたしました、甚五郎取りあへず大久保彦左衛門のお屋敷へ出てれ目通りをする、

大「偖て甚五郎、此のたび大坂吉兵衛、天明善兵衛、皆川町の乱心源太郎の參名へ龍の昇天する形ちを刻むやう、將軍家よりお好みによッて申し付ることに相成つた、併し是れを四方の高欄へ取り付るのであるから、其方へ一ヶ所申しつける、是れは彦左衛門推擧して將軍家へ言上をいたした、差閊はあるまいナ、何うぢや」

甚「恐れながら殿さま、此れは眞とに困ります」

大「行かんか」

甚「へエ……私くしは是れまでに龍を彫つたことはございません」

大「無くとも雛形があるから、彫れんことはあるまい」

甚「夫れは彫れんことはごんせんか、尋常の彫刻なら搆ひません、名人の中へ這入ッて彫りますと、一層目立ッて、餘り見苦しいものを彫刻ひましては殿さまへも相濟みません、此の儀は何うか御免を蒙むります」

大「然れども甚五郎、是れは將軍家の前で斯くいふ彦左衛門た受けをいたした」

甚「夫りやお受けを遊ばしたのは貴君の御勝手、知しは知らんことでございます」

大「ぢやが其方なら大丈夫出來やうと思つて、此方から推擧をしたのだ」

甚「其の御推擧下さいましたのは、眞どに有り難いと申し上げたうございますが、出來ませんものを御推擧下すッたのは、有り難迷惑といふ方でございます」

大「宜い面の皮だ、折角推擧してやッて有り難迷惑だなんて、併し何うか出來さうなもんだ」

甚「夫れが今申し上る通り、名人の中へ加るのですから行けません」

大「其んなことを言はんでやッてくれ、此の彦左が推擧して、其んなら申し付いといふ上意があッて、お受けをして立ち歸ッたものを、今更其方が辭退するとは、將軍家へ申し上げられない、強て其方が辭退すれば、此の彦左衛門皺腹でも切らねばならん」

甚「夫れは御愁傷さま」

大「ナニ御愁傷さまだ、夫れなら其方は、斯くいふ彦左を見殺しにするのか」

甚「何うも據どころございません」

大「據どころないとは情けない一言、此の彦左衛門一命はサラサラ惜まぬが、大久保平助の昔し拾六歳の初陣、鳶の巣梵字

甚「夫りやお受けを遊ばしたのは貴君の御勝手、知しば知らんことでございます」

大「ぢやが其方なら大丈夫出來やうと思つて、此方から推擧をしたのだ」

甚「其の御推擧下さいましたのは、眞どに有り難いと申し上げたうございますが、出來ませんものを御推擧下すッたのは、有り難迷惑といふ方でございます」

大「宜い面の皮だ、折角推擧してやッて有り難迷惑だなんて、併し何うか出來さうなもんだ」

甚「夫れが今申し上る通り、名人の中へ加るのですから行けません」

大「其んなことを言はんでやッてくれ、此の彦左が推擧して、其んなら申し付いといふ上意があッて、お受けをして立ち歸ッたものを、今更其方が辭退するとは、將軍家へ申し上げられない、强て其方が辭退すれば、此の彦左衛門皺腹でも切らねばならん」

甚「夫れは御愁傷さま」

大「ナニ御愁傷さまだ、夫れなら其方は、斯くいふ彦左を見殺しにするのか」

甚「何うも據どころございません」

大「據どころないとは情けない一言、此の彦左衛門一命はサラサラ惜まぬが、大久保平助の昔し拾六歳の初陣、鳶の巣梵字

山の戰かひに、一番乘り一番槍一番首の功名をあらはし、夫より數度の戰場に武名を輝やかし、家康公より當上樣まで三代の君に仕へ、此の彦左がすることについて、是れまで只の一度も遣り損なッたことはない、夫れを今日其方のために、一命を失なふといふのは如何にも殘念至極だ、少とは察してくれ一

甚「夫りや充分お察し申し上げます」

大「察しるなら、其處を何とか一ッやッて見てくれ、眞とに困る」

甚「私しも困ります」

大「然う申さずに、何うか精々いたしたら、其方のことぢやに

依ッて出來んことはあるまい」

彦左衛門に强てと言れた、此處が稼業となると恐いものだ、甚五郎も心ではやッて見たい、末代まで殘りますものだから、併しやッては見たいが、又た名人の中へ却ッて彫刻へて、拙いものが出來あがれば、已ればかりの恥ではない、師匠工の耻だ、然れども何でも出來ないと言ひ張れば、此身ゆゑに大久保さまが御迷惑をなさる、ハテ困ッた何うしたものだらう、ト未だ決心がつかないから考がへてる、

此方は氣が氣ぢやァない、

大「此りや甚五郎、何しろ其方のことだから着手てみろ、彌よ着手て見て思ふやうに出來なかッたら、其の時は何うも致かた

がない、其方解退をしろ、彦左衛門宜いやうに上様へ詫び
を願う」
仕事にかゝってから當人が出來ないといへば、彦左衛門どのゝ手
落ちは輕くなるから、無理やりに壓つける、此方は正直だしれ氣
の毒が一ばいだから、
甚「然やうならお請合申し上げるとは言ひかねますが、兎に角
着手ッて、若し思ふやうに參りませんでしたら、何うか御勘
辨を願ひます」
大「宜しい、如何にも承知した」
彦左衛門どの横を向いてホッと息をついた、ソコデ都合四人の者
が仕事に着手ることになッた、下小屋にあッて追々仕事にかゝる

といふときに、甚五郎も一生懸命、何うか宜い摸範があればいへ
と考がへてをりまする、其のうちに三人は最う彫り馴れてゐる名
人だから仕事にかゝる、下小屋は斯う四つにかゝッてゐるから、
誰れが仕事にかゝッて居るのも見ない、甚五郎は病氣と号して
仕事にかゝらない、内々摸範を調べてゐると、本所猿江町に慈眼
寺といふ寺がある、其處に蛙股の龍が大層宜く出來てゐる、是れ
を聞いたから早速見に行ッた、然處が甚五郎の心もちに少しも適
はない、只だ宜く出來てゐるといふだけで、龍の氣組みといふも
のがない、ポンヤリ歸ッて來ると、今度は本郷の菊坂で、れ醫師
さまの土藏の觀音開きに、漆喰細工で上り龍に下り龍があるとい
ふ、菓子折を一つ持つて、先方へ尋ねて見せて貰ふ、此れを見た

が矢張り何うも、漆喰細工にしては宜く出來てゐるが、何うも生てゐるやうなところはない、然れど鏝細工たからッて上手く出來ないと言ふことはない、近頃伊豆の長八、淺草奥山の村越滄洲ときては名人でございます、甚五郎アイと話しに聞いた、池の端の辨天さまの堂に唐破風の玄行の、其の玄行の龍が法珉の作で、宜く出來てゐるといふから見に行ッた、然るに宜くは出來てゐるが、雨だゝきになッて如何にも年數が立ッてゐるから、所々缺けてゐて能く分らない、何うも龍の氣組みが眞實に取れない、甚五郎落膽して、何うしたものだらうト、御堂の前に考がへて、此の辨財天は兼て蛇体を承知してゐる、此の上は神佛の力を借りて龍の昇天する形を見たい、夫れへ氣がついたから、直に辨天さまへ

願つて夢なりとも、龍の昇天する形ちを見せて頂だきたい、七日の間だ精進潔齋でお參りをした、お百度を蹈んぢやァ願ッて居る、七日目の滿願に至つても何の氣もない、御堂の賽錢箱の前で、お百度は蹈み終つて甚五郎落膽して、

甚「アー是れほど願ッても、神の御心に適はぬものか」

トポンヤリ歸ッて參ると、丁度辨天さまの石橋の前へ來ると、年のころ拾六七になる奇麗な娘がゐる、

甚「往きにも此の石橋の上にゐたんだが、百度を蹈んで只今歸ッて來るのに未だ池を見てゐる、何か浮いたのかしら」

ト思はず立ち留つて見ると、彼の娘は忽ち身を跳らして池の中へドブウーン、

甚「アレ」

ト言ッたが留る間もない、然るに一天俄かに掻き曇ッて參りまして、雨は一時にドウーッと降ッて來た、水は斯う逆立ちまして、池水のやうで有りません、其のうち醜雲舞ひ下ッて、池の中から水音はげしく雲に打ち乘りまして、龍はスッカリ身体を現はしてヅウーッと雲へ打ち乘ッて虚空遙かに昇ると見ましたから、

甚「ハヽア……」

トタンに護國院にて打ち出す鐘、ヂャン、ヂャ〳〵〳〵ヂャン、

甲「オイ……オイ……大層呻されてゐなさるが、何うした、オイ」

甚「ハイ、有りがたうございます」

甲「先刻から獨りで呻されてゐる、最うヂャン〳〵打ッちまッた、暮酉刻だから門を閉なけりゃアならない、周圍が池だから歸るのに困る、オイ、夢を見なすッたか」

甚「ハイ、大きに有りがたうございます」

甚五郎再たび辨財天を伏し拜みまして、大いに喜こび、其の翌日から病氣全快の届を出して仕事にかヽッた、各自に口辞をいたしまする時に、チョイ〳〵仕事の容子を見ますると、皆な頭が出來あがッて、腮の方から斯う蛇腹へかヽッて仕事をしてゐる、甚五郎は七八日遲れて仕事にかヽッたのでございますから、何うしても埒があかない、然れども甚五郎は龍の尻尾の方から彫ッてゐる

でも仕事が早い、三日おくれて龍が出來した、作事奉行は松平伊豆守へ仰せつけられてあるから下撿分がある、天明の善兵衛、大坂吉兵衛、皆川町の源太郎、何れも美ごとに出來た、甚五郎のを伊豆守御覽になると、イヤ汚ないし〳〵、何だかいけ麁ん雜で、第一髭なぞは非常に太い、恐ろしい頭の大きい龍だ、身体に相當しない、出額すけ龍だ、甚五郎のは彫ッぱなしだ、他の人の仕事は何れを彫つたのを見ても、木賊で磨く椋の皮で磨る、此處が惡い此處を彫なほしてと、鑿を貳度も三度もつかふ、甚五郎のは其の改し鑿をつかふてへことがないから餘り汚ない、伊豆守どの〻事だから彦左衛門に一應お話しになッた　デ、彦左衛門何うも上手く行かないのかと心配して、甚五郎をお召しになる、其の呼んで

れ尋になッた時に、

大「甚五郎、龍の出來は何うだ、其方は病氣と申してをッたが然すれば日數がなければ成らん、少々日延べをしても宜い、大層麁雜だといふこッたが何うだ」

甚「イエ、麁雜どころぢやアありません、眞とに能く出來ました」

大「能く出來た」

甚「へエ」

大「だが又た取り付てから、改すやうなことがあッては困る」

甚「何ういたしまして、我が身ながら宜く出來たと思ふくらゐでございます」

大「夫りや大分天狗だ、大丈夫かナ」

甚「大丈夫でございますとも、此の後れ好みになつても匆〳〵如彼は出來ません」

大「然らば取りつけて宜いか」

甚「へエ、宜しうございますとも」

デ、伊豆守どのへ、

大「本人取り付けて宜いと申し、殊に本人上作だと申しをります」

デ、伊豆守どのは

「ナニ、少々拙劣くツても此方の不念にはならない、元々彦左衛門が推擧したものだから」

〳〵ト早々四方の高欄へ取りつけた、取りつけて見ると伊豆守驚ろいた、

「流石は名人、成るほど下で見たときは、非常に髭が太い、頭の大きな出額すけ龍で、如何にもいけ麁雜だと思つたが、斯う取りつけて見ると無類だ」

只今もつて歴然と鐘樓堂の臺石だけは存つてをります、高欄へ取りつけると、ズツと間數も高く、下から斯う見上ると、苔は一枚〳〵に立つて、蛇腹と言ひ、龍の頭なぞは、下にあつたときは出額すけだつたが、上に行つたときは少しも大きくない、丁度身体と相當してゐる、髭なぞも非常に太いと思つたが、上へ行つて見ると丁度宜い、三人のを上へ取りつけて見ると、少と頭が少さい

髭も細すぎる、反對に今度は三人の方がジャガタラ龍で、少と頭が少さすぎて可けない、然るに三代の源君いよ〳〵御靈屋御參詣鐘樓堂出來の趣むきを申しあげましたから、是れへお立寄りになッて御覽あろばされ、鐘樓堂の周圍をお廻りになッて、西側の龍の下へ成らせられると、

將「彦左〳〵、此の龍は何者が彫ッた」

大「エー甚五郎にござります」

將「ハア然やうか、アー彼れは名人ぢや」

ト仰しやッた、他の龍は何ともお尋ねにならん、西側の龍だけをお尋ねになッて、名人ぢやと仰しやッて御歸城になッた、將軍お聲がゝりになッたのは甚五郎の刻んだ龍だけ、此の龍が夜な〳〵

辨財天の池の水を飲みに出たと、何ういふところで分ッたかといふと、朝々雨の降らないのに、面側の龍の下に雨降りあげくのやうにグッチャりになり、切面へ水が溜ッてゐる、デ、全たく〻龍水を飲みに出ると評判高く、末にいたッて西側の龍だけ、幕府のころ、腦天から大きな鋲が打ち込んである、是れ甚五郎利勝の刻みました水飲の龍といふ、一席のれ物語りであります……』

水飲みの龍　終

乾魚で音信

一龍齋貞山講演

石原明倫速記

朝妻船を畫いて遠島になッた英一蝶のお話しを辨じます、此の一蝶といふ人は、承應元年相州に生れまして父は多賀伯庵といふ醫師、寛文六年十五歳のとき江戸へ參りまして、其の頃有名の狩野安信を師として畫を學びました、幼名を猪三郎、後ちに次郎右衛門と改ため、剃髪いたしまして朝湖、書は佐々木玄龍に學び、俳句は芭蕉桃青大人の門下で、俳名を曉雲と申しました、其角、嵐雪、杉風などといふ其の〳〵ち有名の俳人と親しき友、元祿十一年のころ日本橋吳服町に住してをりました、酩酊のあまりとは申し

ながら、只今形ちの殘りをとりまする、朝妻船といふ畫を描きまし
た、其のころ五代將軍綱吉公、柳澤の屋敷へ折り〳〵成らせられ
まして、其の奥方へお手がついたといふ惡評がありましたる際な
れば、彼の朝妻船といふ畫が、大分市中の繪草紙屋に賣り弘まり
ますると、此れが好評になりました、直ちに朝湖お捕縛になりま
した、只今で申せば不敬罪、暗に五代樣を誹謗いたしたといふか
たちに成りました、遂に三宅へ遠島仰せつけられました、繪双紙
屋は悉皆く右の畫は沒收されました、版元は闕處、何うも嚴罰に
處せられました、時に朝湖四十七歳、酩酊のあまりの不敬罪、只
だ悄々といたしまして、深川万年橋から船へ乘せられまして島へ
送られるのだ、德川さまのころ遠島と申しますると、伊豆の三宅、

新島、八丈、此の三つの島で、春船秋船と申しまして壹年に二度
船が出ます、南北より出ますから、都合與力貳人、かならず同人
貳人づゝ、お船手役人貳人、夫れゆゑ右罪人を船へ乘せる、島の
遠近によりまして公議からお手當が出ます、麻の袋へ入れて、其
の袋へ新島行き、三宅行き、八丈行き、チャンと行く先きが認め
てあります、與力同心に引かれて來てお船手へ渡されます、其の
お船手へ渡すときに聊さか猶豫がございます、今しも朝湖、愁然
と船へ乘り移らふといたしますときに、

其「朝湖」

ト呼ばれまするから、振りかへッて見ると、其のころ茅場町にを
りまして有名の宗匠、寶晋齋其角だ、

朝「此れは〳〵、誰人かと存じましたらお兄イさま、能くお尋ね下さりました、入牢中も度々お尋ね下さいまして有りがたう存じます」

其「ヤ、何うも氣の毒千万なこと、併し此れも災難と斷念なさい、就ては今日其許の妻子、また弟子なども送りに來ると言ッたが强て制めて、總名代に私一人來ました、ト申すは妻子に袖に縋られ愁嘆がある、夫れこそお前の身体を惱めて可かん、三宅へ參りまして、モウ天地の間に三宅五ヶ村より外に人はないと覺悟をしなさい、江戸の朋友は何うしたか、妻子は何うしてゐるかと、夫れを考がへたら屹と自分の身体を惱ましし、夫れこそ煩ひでもしたら取ッて返しがつかぬ、モウ天

地の間に三宅五ヶ村の外には、モウ人はないと思ッてゐれば必らず安全だ、身体を大切にしなさるが宜からふ、妻子一同のことは少しも心配なく、万事私が引うける、何れ恩典の御沙汰もあッて、亦た打ち寄ッて一杯飲むこともあらふ」

朝「有りがたうございます、何ともれ謝辞の申さうやうもございません、此の上とも何分妻子のところをれ願ひ申します、併し私しが三宅へ參ッても、罪人の身であッて見れば、別に音信の致しやうもございません、承たまはりまするに、私しが彼島へ參れば、もろ鰺を製造へるのが勤めださうでございます、若しもろ鰺の乾魚をお求めになッて、眼に土の這入ッてゐるのがありましたら、是れが朝湖の製造たものだと御覽

ください、私しの製造へます乾物には必らず目に土を入れておきます」

其「ハヽア成るほど、此りやア面白い考がへ、能く心づかれた乾物を求めたら第一眼へ氣をつける、宜い考がへだ」

兎角するうち役人衆に、

役「サア〳〵」

ト迫めたてられ、思ひを跡に殘こして朝湖は船に乗りうつる、其角は是非なく万年橋の橋上に立ち留ッて見てをります、ブウーブウーと竹法螺の音が是れが合圖、ギイッと船が出ます、其角は直に永代橋の橋上へ參りまして、復た其の船を見送ッてをりまするうちに、何のほどにか佃の影ついに此の船は見えなくなる、モウ

詮方がないから立ち歸り、茅場町の宅へ戻ッて來ても氣が揉める空を眺めて、

其「沖が暴れなければ宜い、無事に朝湖が着いてくれゝば宜い」

眞とに信義が厚い、翌朝起きる、お大名のお召しや何かに氣を取り紛らしてをります、其のうちに朝湖の製造た乾魚が、モウ江戸へ廻ッて來た時分かしらと日々を考がへます、夫れから塩魚屋を尋ねて見やうと、四日市には軒並に塩物問屋があるから、是れへやッて來た、

其「御免なさい」

何者でも其角宗匠を知らない者はない」

若「サア旦那、此方へ」

其「乾魚を少し貰ひたい」

若「エー何枚ばかり」

其「氣に入ッたのがあれば一枚買ふ」

若「へエ、貴君、乾魚を一枚……何うぞ澤山お求めなすッて」

其「オヽ其處に乾魚がある、一枚見せてれくれ、もろ鰺が宜いんだ」

若「サア御覽なせへ、澤山ありますから此方で綏くりと」

天下の大人少しも物に動じない、其角宗匠見世先へ坐ッて、サア是れから一枚〳〵に顛覆かへして稍や三時ばかり、顛覆かへし裏くりかへし見たが、眼に土の這入ッてゐるのがない、

其「エー殘念千万、氣に入ッたのはない」

ト濟まして出て來る、

若「エーコウ人を馬鹿にしてゐやアがる、小半日も見世先さへ坐ッて、散々見ちらかシャアがッて、買ひもしねへで歸る、彼リャア氣が違ッてゐるんだ」

其角宗匠平氣で隣りの家へ來て、

其「もろ鰺の乾魚を見せてもらひたい」

若「サア宗匠御覽なさい」

此家にも氣に入ッたのがないと出て來る、又た隣りの家へ行く、無い、其の日は三四軒で歸る、又た翌日出て行ッて一軒〳〵搜す、無い、一日二日間を隔て出かける、終には茅場町の宗匠は氣が違ッてゐると、姿を見ると慌てゝ隱してしまッて見せない、詮方が

ないから宗匠は或るとき圓窓から首を出して往來を眺めてゐる、魚賣が通る、呼んで聞て見るともろ鰺があるといふ、引留て顛覆かへし裏くりかへし散々見た揚句に、氣に入ッたのがないと斷ッて買はない、ダガ決して朝湖の製造た乾魚が江戸へ來る、四日市へ着くとは定らない、謂ゆる雲をつかむやうな尋ねもの、毎日其の通りやらかすので、終には魚賣りが寄ると、

甲「オイ、日本橋の茅場町は迂濶り通れねへぜ」

乙「眞とだ、もろ鰺の乾魚を持ッたら迂濶り通れねへ、圓窓から面ア出して眺めてゐて、摑めへたら放しッこはねへ、散々見やアがッて氣に入ッたのがねへと言ッて買やアがらねへ」

丙「何うしたてんだい」

甲「氣が違ッてるんだ、狂人だ」

斯う評判になッちまッたから、昨今圓窓へ宗匠首を出してゐても少とも魚賣が通らない、又た或るときは四日市の塩魚問屋へ出て行く、其角の姿を見ると、

若「宗匠、乾魚はない」

ト最初から斷はられる、サア斯うなると尋ねる便りがない、

其「アー殘念千万」

ト今日も圓窓から首を出して往來を眺めてゐると、未だ商賣馴れない魚賣が何かと見ゐて、其角の家の前を一人通ッた、大人喜アんで格子を開けて往來へ飛び出した、

其「魚賣待ッてくれ」

振りかへッて見て魚賣氣がついたア、失策た、迂濶り通ッたが多分此處の家だ、乾魚を持ッてゐると見ちらかして、一日放さねへてへなア、其んなとこへ摑まッて堪るものかと腹で思ッて、

魚「宗匠、お氣の毒さまですが乾魚はございませんよ」

其「只今乾魚と吐鳴ッてゐたヂャアねへか」

魚「イエ、生魚ばかりです」

其「生意氣なことを言ふナ、其方なんぞは生魚ばかりの魚賣ヂャアない、鰊に棒鱈、數の子精々の魚賣だ」

魚「ヤ、甚いことを言ふヂャアありませんか」

其「何は兎もあれ此方へ來てくれ、愚圖〳〵言はねへで此方へ來い」

トウ〳〵格子の前へ引張ッて來た、

其「此の通り乾魚を持ッてるヂャアないか」

魚「トウ〳〵摑まッちまッた、何うか成るたけお早くお願ひ申します」

其「ヨシ〳〵、併しコレ……魚賣に烟草盆をやれ、茶を持ッて來い」

魚「イエ、茶も烟草盆も入りません」

其「サア有りたけの乾魚を出して見せろい」

宗匠顚覆かへし裏くらかへし見る、

其「アー此れだけ苦勞をするにない、扨ては死んでしまッたのか」

魚「宗匠、乾魚は皆な死んでゐます、生た乾魚てへなアございません」

其「ェー默止ッてゐろ」

又も一枚〳〵に見てゐると、過まッて這入ッたのか、巧んで這入ッてゐるのか、目に土の這入ッたるのが一枚あッた、是れを手に取りあげると宗匠狂するばかり、

其「アー居てくれたか、會いたかッた、兄弟何うした、能く無事にゐてくれました」

魚賣膽をつぶした、

魚「オヤ〳〵、此方の宗匠に乾魚に兄弟分があるのかしら」

其「アー嘸寒くッて難儀だらふ、併し妻子のことは心配しないが宜い、此方へ引取ッて別に家を持たせ、子供も手習にゐげた、此のごろは大分手跡も美ごとに書けるやうになッた」

魚「ヤア不思議なものだ、乾魚に妻子があるかしら、見當の付ねへ話しだ」

其角は夢中だ、

其「アー嘸ぞ寒かッたらふ、能く夫れでも無事でゐてくれました」

此れから例の乾魚を蒲團の上へなほしまして、早速薄茶を立てまして宗匠、

しまひぬに茶を申す日の寒さかな

其「アー魚賣さん、滿足しました、兄弟久しぶりで會ひました

急がしいところを引とめて氣の毒だッた」

トれ金を壹兩くれました、魚賣は大喜こび、此の場の金壹兩は莫大なものだ、ニコ〳〵悅こんだ、

魚「何うだい傲氣ヂャアねへか、其角宗匠のところへ、氣に入ッた乾魚を持ッてけば壹枚で壹兩くれる」

甲「其いつア傲氣だ、ソレ行け〳〵」

ト魚賣が大勢氣をそろへて、ワイ〳〵やッて來た、其角は驚ろいて、

其「モウ乾魚は入らない」

ト裏口から逃げ出すやうな騷ぎ、後ちに其角から島の朝湖へ贈りました句に、

はつ松魚からしはなくて涙かな

成るほど朋友の信義は充分籠ッてをります、夫れを朝湖有りがた涙にくれました、スルト丁度滿期になッて放免される罪人が、朝湖に、

甲「私しも久しぶりで放免になッて娑婆へ歸ります、何ぞお傳言はありませんか」

朝「では何うぞ茅場町の兄貴へ是れを」

ト託して遣した返句が、

其の辛子きいて涙の松魚かな

風流に遊びますものも、朋友になりますと其の信義は深うございます、然處が朝湖、寶永六年大赦になりまして、後ちに英一蝶と

改め、又た高齢におよびまして北窓と申しました、深川永堀町に住居いたし、享保六年甲辰の五月十二日行年七十三で沒しました、菩提所は芝二本榎の承教寺の寺中の願乘院に葬むり、法名は

英受院一蝶日意信士

辞世に、

さらかす浮世のわざの色彩りも
ありとや月のうすいみの空

乾魚で音信終

一文惜百兩損

寶井馬琴講演
石原明倫速記

エー伺がひますが、講談は全体武張ッてをります、中にチョイチョイと滑稽雜談を変せて伺がひます、併し當今は滑稽七分にシッミリしたところは三分、餘り堅いことばかりではお慰さみにもならんといふやうに、講談の格が餘ほど崩れてをります、此れは我々連中で辯じまする、名乘行といへば大岡越前守どのに止まるやうでありますが、然うも限りはいたしません、併し越舟どのお調べ中には、種々の愉快なお調べもあります、

爰に神田の紺屋町に親重代紺屋渡世をいたしてをります、五兵衛

といふ者があります、長家が三棟もあつて、地面も四五ヶ所もあります、大勢の職人を使ッて肌あひな人です、此の五兵衛の隣り地面へ移轉て參りましたのは、生國能登の七尾の者で、屋號を德力屋と言ッて、主人の名を万右衛門と言ひ、質渡世でございます百に四文の利を見る質渡世、其の節儉なることは言語同斷、追々金ゲ貯りまするから、江戸は火事早いといふので、客人から預かる質物を燒いてはならんにより、宜い土藏を建てやうといふので三間四方の三階づくりの土藏を建てます、然るに五兵衛の地面さかひ、此處へ土藏を建てられると、五兵衛の仕事場へ少しも日があたりません、ソコデ五兵衛が大勢の職人を預けておく、世話役の源左衛門といふ者を呼んで、

五「エー時に爺や、れ前氣の毒だが隣家へ行ッて、一つ話しをつけて、三間土藏を退げてもらふやうに話しをして來て吳んねエ」

無手でも行かれめへといふんで、三つ割を一樽、目の下一尺ばかりの鯛が一尾、是れを持たして万右衛門のとこへ照會にやると、

万右衛門、源左衛門に會ッて、

万 何うぞ五兵衛どのに然う言ッてください、私の地面へ私が金を出して土藏を建てるのだから、五兵衛どの丶指揮は受けんと宜しく言ッておくんなさい」

ケンもホロ丶の返答、其上に持ッていッた酒肴は取りッぱなし、源左衛門歸ッて是れを五兵衛に言ふと、

五「何だと、巫山戯たことを吐す奴だ、昨日今日能登の七尾から江戸の大都會へ出て來て、金が出來たといふので大きな面をしてゐる、生意氣なことを吐かす奴だから目に物みせてやらふ」

ト番所好きの五兵衛だから、直に願書を書いて、南お町奉行大岡さまへ願ッて出ると、越前守どの、早速万右衛門へ招喚狀、五兵衛も万右衛門も法廷へ出ましたときに

大「是れ德力屋万右衛門、此たび其方隣家の紺屋五兵衛、慈愛を汲んで其方が出來へる土藏を、三間退けてくれいと申したに、強情を申して退げん由であるが、三間ぐらゐ退けつかはしても、別に障りはあるまいと思ふが何うヂャ」

万「恐れながら万右衛門申し上げたてまつります、私しの地面へ私しが金を出して土藏を建てまするに、五兵衛の指揮は受けません、退ることは出來ません」

大「然やうであるか、其方の申すること尤ともである、万右衛門用事ない立て」

ソコデ万右衛門を退げてしまふ、

大「此りや五兵衛、万右衛門のやうな分らん者に搆ふナ」

五「搆ふなと仰シャッて、夫れヂャアお奉行さまへ願ッた甲斐がありません、善惡を審理てくださるがお奉行さまのお役た先方の言ひなり次第になッて万右衛門を退げちまッて、夫れヂャア願ッた甲斐が無いヂャアございませんか」

大「夫れはナ、通常に理解の分るものなら越前、理合を解く、万右衛門のやうな分らん奴は、何を申したとて徒勞だから退げつかはした、其方は理解の分るものだから、今越前が話しをして遣はすことがあるから能く聞け」

五「へエ」

大「余が番町にをッた時に植木が好きであるから、數多の植木を愛してをると、隣り屋敷の主人が意地の惡い奴で、餘ほど高い塀を建てゝ余の庭へ少しも日があたらん、ソコデ家來をもッて、塀をモウ少々低くしてくれんかと照會た、スルト我が拜領地へ我が勝手に建てる塀であるから、越前の指揮を受けんと申するより、余も致かたがないから植木屋へ植木を退

げてしまひ、ソコデな、是れ五兵衛、能く承たまはれ……余が錦魚を養はふと思ッて、庭へ大きな池を堀り、其の下でしらへの穴を堀ると、隣りの塀が倒れかゝッて參る、スルト隣屋敷から家來をもッて、何うか其の穴を三間退げてくれんか手前の方の塀が倒れると申して使者を遣したから、其のとき余の申すには、越前が拜領の地へ勝手に穴を堀るのであるから、隣家の指揮は受けんと追ひかへしてつかはしたがナ……」

五「へゝエ成るほど……流石は名奉行さま、有りがたうございます、へエ然やうなら」

大「是れ〳〵控へろ」

五兵衛勇み竹ッて自宅へ歸ッて來た、

源「ヘエー親方お歸り、訴訟は何うでございます」
五「訴訟か、訴訟は已れの方が負けだ」
源「ヘエー負け……名奉行ヂャアでございませんか」
五「名奉行でも已れが負けだ」
源「其いつは解の分らねへ話しだ、一体何うして負けなんです」
五「其んなことア聞かなくッても宜い、サア權治、出入の鍛冶屋へ大急ぎで行ッて、鋤を十挺鍬を十挺一緒に持ッて來て貰へ、已アモウ紺屋稼業止めだ」
源「而して何をするんです」
五「是れから錦魚屋を始めるんだ」
源「戯談言ッチャア可ねへ、此の寒さに向ッて錦魚屋なんざア

出來ねへ」
五「ナニ出來ても出來なくッてもするんだ」
程なく鋤鍬を持ッて來る、五兵衛半纏一枚になッて向ふ鉢巻をし
五「サア皆な是れから穴を堀ッてくれ」
是れから五兵衛の地面へ總ぐゝりでドン〳〵穴を堀る、地面境のところをズウーッと竪にして横穴を深く堀ッて行く、万右衛門足場へ登ッて之れを見て大きに驚ろき、
万「番頭や隣りへ行ッて懸けあッて來い、彼處へ穴を堀られては困る、此方の土藏が倒れて穴へ這入ッてしまふ、穴を三間跡へ退げてくれと、先方から進物を持ッて來たんだから、此方からも進物を遣らなくッチャアなるまい、其處にある貰ッ

た乾魚を三十枚ばかり持ッて行け」

番「へエ、では行ッて參じます」

乾物を三十枚入層らしく魚籠へ入れ、夫れを持ッて番頭がやッて來た、

番「御免下さい」

五「何だい」

番「エー主人万右衛門が申しますには、其處へ穴をお堀りになッては手前どもの土藏が倒れますから、何うか三間通り跡へお退げなすッて頂だきたい、是れは詰らん物ですが……」

五「ベラ棒め、歸ッて万右衛門に然う言へ、此の五兵衛が親から譲られた地面へ、勝手に穴を堀るんだから、能登の七尾から出て來た芋ッ堀の万右衛門の指揮は受けねへと然う言へ、

未だ手前たちは田舍ものだから、乾魚なんぞを有りがたく、鯛の刺身のやうに思ッてゐるだらうが、江戸ッ子の此方とらニャア、乾魚なんぞアお齒に適はねへ、持ッて歸れ、グヅ〳〵するを打やしつけるぞ」

番頭青くなッて歸ッて來る、詮方がないから町内の爲頭に賴んで万右衛門、自分の土藏を三間退けなけりゃア成らないから、是れから、出ゝか石新たに地形をしなほす、夫れまで五兵衛は穴を堀りッぱなしに、仕事を投たらかしておく、是れから彌よ地形が出來て土藏の木口の上棟ゞ濟み、小舞竹を搔き終ッたから」

五「ソレ穴を埋めろ」

元の通り平地にして丸太を建ッて、翌日ッから仕事にかゝる、万右衛門此れを見て、

万「畜生忌いましい奴だ、彼奴の計策にかゝつちまッた、エヽ口惜しい、ソレ土藏を彼地へ持ッて行け」

然う土藏が自由ニャア成らない、トウ〳〵泣き寐入り其のまゝ建てゝしまッた、此いつが喧嘩の發端で、何ごとかあッたら万右衛門に、目に物みせてくれやうと五兵衛は考がへてゐた、デ、此の五兵衛の長家に八五郎てへ者がある、眞とに威勢の宜い男だが、身持が放蕩だにより、惡ひ病ひが發して、骨がらみの兩横根となる、如何にも可哀さうだから五兵衛が、

五「八公、手前も今の若さに骨がらみの兩横根とさて、他の若

へ者と交際の出來ねへのは可哀さうだ、ソコデ己れが奉加帳をこしれへてやるから、是れを持ッて町内を歩行いて、何程づゝでも惠んで貰ッて來い、然うして基金が出來れば、跡は已れが何程でも足して、療治の出來ることにしてやらふから病に宜い温泉へ行ッて湯治をして、スッカリ身体を癒して元の八公になれ」

八「何とも家主さん有りがたうございます、何から何なでれ世話になッて濟みません、有りがたうございます」

ト涙を流して喜こび、二本杖に縋ッて奉加帳をもッて八公、ッヒ表隣りだから德力屋万右衛門のとこへ一番にやッて參り、

八「今日は、御免なせへ」

番「オヤ八さんお出なさい、何か質入ものですか」

八「なアに然ういゝわけヂャアない、今度家主さんが心配してくれて、私を湯治にやッてくれるといふんで、眞とに濟まねへが此の帳面へ何程かお記けなすッて」

五「夫れはれ氣の毒だねへ」

番頭が、

番「ヂャア八さん、此れは心ばかり」

ト塵紙へ包んで出した、

八「有りがたうございます、何うか是れへ記けて下さい」

番「ナニ記けなくッても宜い」

八「マア一寸いと記けて下さい」

番「記けずと宜いから持ッてお出でなさい」

八「此れは有りがたうございます」

ト頂いて、何程あるかと八公塵紙を開けて見ると、ビタ錢で四文、

八「此リャア番頭さん、有りがたうございますがれ返し申します」

番「ヂャア不足か」

八「不足ヂャアございませんが、初筆が四文ヂャア、後が貳文參文てへことになッて祿に集まらねエ、切てお家の身代だから、壹兩も記けてれくんなせへナ」

番「馬鹿なことを言ひなさい、百に四文の利を取る質屋渡世をしてゐて、壹兩なんて奉加について堪るものか、能く考がへ

て御覽、四文の錢だッて大地を堀たッて出やアしない、お歸り〳〵緣起が惡い」

八「ナニ……ヤイ番頭、與れなけりやア與れねへで宜い、お歸り〳〵緣起が惡いとは何だ、手前んとこが能登の七尾から出て來て、西も東も知らねへのを、巳れが町内を歩行いて是れまでの身代にしてやッたんだ、夫れだから手前のとこに取ッたら巳れア、八五郎大明神だ、緣起が惡いとは何だ、只今辛いめに遭はすから然う思へ、身体ア惡いけれど口は達者だ、見やアがれ」

ト戸外へヨタクタ出て行ッたかと思ふと、用水桶の片わきへ犬がコテ〳〵盛てれいた糞を、草履の裏へベタ〳〵蹈付けて、

八「サア此ん畜生、馬鹿にしやアがるナ、ベラ棒め、身体が利かなくッたッて手前たちニャア負けねへ」

ト犬の糞草履で疊の上をヅカ〳〵歩行き始めた、

番「オヽ臭い〳〵、此リヤ堪らない、八さん巫山戯た眞似をしなさんな」

騒いでゐるところへ万右衛門が奥から出て來て、

万「ヤイ八公、商人の見世へ來て何を巫山戯る、此の野郎」

ト持ッてた烟管で頭を打つ、八公の額へピシリ當ッて血がダラダラ出る、

八「サア、能く爾ア巳れを打チャアがッたナ、打つなら打て、巳れの身体ア、打てば打つほど直が出るぞ」

白痴が大門通りへ行ッて半鐘を買ふ氣になッて、音が出る〳〵音が來ると仰向けになッて八公、手足をバタ〳〵動かして暴れたから、傍にあッた突然り火鉢を顚覆かへした、

万「是れ八公、非常第一大切にする火鉢を轉覆かへして、火事になッたら何うする」

八公膽をつぶして起きあがり、

八「騷ぎなさんな火は水で消る、ソラ此の通り」

ト雨を捲ッて小便をシャア〳〵垂れ流した、

万「マア亂暴な奴だ、呆れけへッた奴だ」

騷ぎをしてゐる、然處へ町内の鳶頭が駈けつけて來て、

頭「マア八公、何を詰らねへことをするんだ、惡いやうニャア

しねへ、マア〳〵已れと一緒に來い」

ト漸やく自分の家へ連れて來て、而して万右衛門のところへ鳶頭が引返して來て、

頭「さて旦那、八公がれ見世を騷がして眞とに相濟みません、併し彼奴も身体が惡くて可哀さうだ、何うか憫然と思し召して、金の二三兩も惠んでやッてお呉んねエ」

万「鳶頭、戯談言ッチャア行けねエ、彼奴のために疊を此の通り汲され、其上に威張れて何で金なぞやられるものか、百の錢もやることは出來ません」

ト大立腹で取ッても付けない、詮方がないから鳶頭は歸ッて來て自腹で二分の金を惠んでやる、八公二本杖に縋ッてヨタ〳〵自分

の家へ歸ッて來て、轉がッて口惜しがッてゐる、然處へ五兵衛が深切に雜炊のこさへたのを鍋のゆゝ、自身に提けてやッて來た、

五「何うした八公、少たア集まッたか、サア雜炊をこせへて來たから是れを食へ……ヤ、何うしたんだ額へ傷が出來て、大層顏の色も惡いが……」

八「家主さんでございますか、私ッシャア最う口惜くッて口惜しくッて堪りません」

五「何うしたんだ」

八「何うしたッてマア聞いておくんねへ、今日德力屋万右衛門のとこへ奉加帳を持ッて行ッて、是れ〳〵斯ういふこッて頭を打たれました」

五「何だ、万右衛門に打たれた、能く打たれて來た、能く打たれて來た」

八「餘まり善くも打たれチャア來ませんよ」

五「イヽヤ確かりしろ、已れが附いてゐるから確かりしろ」

八「ナニ家主さん、お前さんが附ひてゐるから此んなことに成ッたんだ」

五「愚痴をこぼすナ、サアかッこめ……かッこめ」

八「戲談言ッチャア行けませんし」

五「何が戲談だ」

八「だッて其の烟の出てゐる雜炊を、かッこめるもんヂャアでさいません」

五「雜炊をかッこめッてへのヂャアない、南のお奉行所へ駈ッ込めてへんだ」

八「尚ほ可けませんや、私しはヨイ〳〵だから、迚も駈け込むことなんざア出來ません」

五「ナニサ轉がッて這入ッても駈ッ込むのだ、直ぐ已れが願書を書いてやるから駈ッ込め」

是れから五兵衛が願書を書いてやる、八公雜炊で腹をこさへて、二本杖に縋ッてヨタ〳〵、敷寄屋橋内の南の町奉行を差して出かける、五兵衛は袴を穿いて机の前へ坐ッて、今に招喚狀が來るだらふと待ッてゐる、此方は八公一生懸命、杖を力に紺屋町を出て一町歩行いては立ち止り、二丁歩行いては亦た立留り、休み〳〵

漸〳〵の思ひで大岡越前守さまのれ役屋敷へやッて來た、

八「ヱー御門番さん」

番「何だ」

八「御訴へでございます、大岡さんはお在宿でございますか」

番「未だ君は御下城にならん」

八「夫れヂャア女房さんへ宜しく」

番「此れ〳〵何を申す、亂暴な奴が來た」

八「ヘヱ御免なさい、お願ひでございます、駈ッ込みでございます」

聲は大きいが身体はヨタク〳〵二本杖に縋ッて、お玄關へか、ッて行く、門番も驚ろいて、

番「お玄關御訴たへでございます」
ト聲をかけた、直に願書お取りあげになる、程なく越前守どの御下城、願書をお調べになると、願ひ人神田紺屋町家主五兵衛店子八五郎とある、ソコデ相手かた德力屋万右衛門はじめ直ぐ總体へ招喚狀、地主名代が紺屋へ來て、

名「五兵衛さん〳〵」
五「オッと心得た、番所かへ」
名「能くお前さん御存知だねへ」
五「ナニ知らねへが、今日は天氣の具合で番所がありさうだと思ッたから、チャンと支度して待ッてゐたんだ」
名「戯談言ッチャア可ねへ、お前さんの長家の八五郎が、只た

一人で御番所へ訴たへて出ました」
五「此リャア大變、直に出ます、支度が出來てゐるから」
ト直に數寄屋橋うちへ出る、德力屋万右衛門をも招喚で出る、直に一同法廷へ呼び込みになる、越前守どの、
大「神田紺屋町家主五兵衛店子八五郎」
八「ヘエ」
大「願書の趣き相違ないか」
八「相違ございません」
大「是れ万右衛門、其方は年甲斐もなく、八五郎が奉加帳を持ッて參ッたとき頭を打ッたと申すが、質渡世の身をもッて人の頭を打つといふは不法であらふ」